

岡山朝日 研究紀要

*The Asahi
Bulletin (39)*

第39号
2018.3

目 次

新しい時代にふさわしい学力の育成	田 中 広 矛 (1)
CT数学のウラ技を探る — マーク試験ゆえの荒技集 —	山 川 宏 史 (3)
学びをつなぐ『化学基礎』の取り組み	守 屋 昌 樹 (11)
新しい学習指導要領の理念を踏まえた授業づくりに関する一考察 — 高等学校における主体的・対話的で深い学びの創造 (2) —	藤 原 絵 美 (17)



永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌	辰 田 芳 雄 (1)
室町・戦国期荘園制を支えた割符 — 新見荘や北陸など中間地域荘園の事例 —	辰 田 芳 雄 (49)

岡山県立岡山朝日高等学校
Okayama Asahi Senior High School

三十一日

都鄙立者

[illegible]

9

子曰惟興

者毎を世をいふは子の松の松の所を人量
 世をいふは子日一を其を去るにふ那富

はなはたふかき海へ一重雲の風を胸にまかせ
あきらめろ

思ひとてみれば

749

社頌祝世

[illegible]

永正2年3月3日起日後柏原天皇主催着到和歌

国立公文書館所蔵内閣文庫「着到和歌」(201・146)

起日の「三月三日 都鄙立春」と満日の「六月十四日 社頭祝世」

永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌

辰田芳雄

目次

はじめに

一 永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌の概要

(1) 現存する原本と写本

(2) 詠者

(3) 古記録の記述から見いだせる着到和歌の特徴など

二 原本について

(1) 三月十三日 樵路早蕨

(2) 三月十九日 雨後苗代

(3) 四日一日 荒砌瞿麦

おわりに

※『紀要』三七号『文明十二年九月一日起日後土御門天皇主催着到和歌の翻刻』の補論

◎国立公文書館所蔵内閣文庫「着到和歌」(二〇一・四六)当該部分の翻刻

はじめに

着到和歌は、起日が主に三月三日或いは九月九日でその百日後に満日を迎える定数歌であり、十人前後の参加者が春・夏・秋・冬・恋・雑の部で構成される兼題を詠歌し、自筆記録する文芸である。起日と満日は身分の高い順で記されるが、他の九十八日間は身分や藤次に関係なく、籤によって無秩序に記載されることに特徴がある。特に後土御門天皇や後柏原天皇の時代に盛んに行われた和歌の形式で、江戸時代では霊元院の時に再興された。

ここに取り上げる永正二年（一五〇五）三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌は、後柏原天皇が即位後に主催した最初の着到和歌である。

一 永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌の概要

（１）現存する原本と写本

現存する原本は、後掲する三日分である。

後柏原天皇自筆による写本がある。国立歴史民俗博物館蔵高松宮伝来禁裏本「禁裏御着到和歌」（日一六〇〇—一六一五、ユ函二二）。

『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書 文学篇第一一巻（中世定数歌）』（臨川書店、二〇〇〇年）に影印と小川剛生の詳細な解説がある。

る。国立歴史民俗博物館のデータベースの備考には、「各歌人の自筆」とあるが、六月一日村々煙細は三条西実隆の詠を欠いているので、小川の解説の通り後柏原天皇自筆の写本とするのが妥当である。五月二十七日寄虫切恋から六月六日夕陽映嶋までの十日分がそれぞれの筆跡を模して書写されている。同時代の写本として貴重である。

江戸時代の写本には、（ア）国立公文書館所蔵内閣文庫「着到和歌」（二〇一・一四六）、（イ）宮内庁書陵部「御著到部類」、（ウ）宮城県図書館伊達文庫本「近代着到和歌」、（エ）国立歴史民俗博物館蔵高松宮伝来禁裏本「禁裏御着到和歌」（日一六〇〇—一三三三、ふ函八〇）などがある。これらの写本は、数種類の着到和歌の写しをまとめて合本にした写本集である。ここでは、（ア）を底本にして翻刻する。（イ）を対校本とする。

なお、（ア）は「浅草文庫」で、一頁から一二二頁は永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌、一二二頁から一七二頁は明応二年三月三日起日勝仁親王主催着到和歌、一七二頁から二二七頁が永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌で構成されている。

（２）詠者

詠者は十一人である。以下に各人の沿革を記すが、その順は、三月三日起日「都鄙立春」と六月十四日満日「社頭祝世」の記載順（即ち、藤次順）である。

後柏原天皇は、寛正五年（一四六四）誕生、当時四十二歳。在位

は明応九年（一五〇〇）十月二十五日（三十七歳）から大永六年（一五二六）四月七日（没）六十三歳。諱は勝仁。歌集『柏玉集』がある。三条西実隆の『雪玉集』、冷泉政為の『碧玉集』とともに、三玉集と呼ばれた。

三条西実隆は、康正元年（一四五五）誕生。天文七年（一五三七）没、八十三歳。当時五十一歳、正二位、権大納言、侍従、神宮伝奏。後土御門天皇・後柏原天皇・後奈良天皇に仕える近臣。文明七年に蔵人頭、永正三年（一五〇六）に内大臣。約六十年にわたる精密な『実隆公記』は戦国時代の政治・社会・文化を知る上で重要。日記『実隆公記』、歌集『雪玉集』がある。

下冷泉政為は、文安三年（一四四六）誕生。大永三年（一五二三）没、七十八歳。当時六十一歳、正二位、前中納言、民部卿。歌集『碧玉集』がある。

上冷泉為広は、宝徳二年（一四五〇）誕生。大永六年（一五二六）能登で没、七十七歳。当時五十六歳、正二位、左衛門督。歌集『前大納言為広卿集（清玉集）』、『為広卿集』、『為広詠草』、『為広卿詠』、『為広詠草』がある。

綾小路俊量は、宝徳三年（一四五二）誕生。永正十五年（一五一八）没。六十八歳。当時五十五歳。正二位、按察使。父は綾小路有俊。家伝の郢曲や笛を能くした。

小倉季種（季熙から改名）は、康正二年（一四五六）誕生。享禄二年（一五二九）没、七十四歳。当時五十歳、従二位、権中納言。

甘露寺元長は、康正二年（一四五六）誕生。大永七年（一五二七）

没、六十二歳。当時五十歳、従二位、権中納言、賀茂伝奏。父甘露寺親長は『親長卿記』の筆者として著名、自身も『元長卿記』を書く。

田向重治は、宝徳三年（一四五二）誕生。天文四年（一五三五）没、八十五歳。当時五十五歳、従二位、権中納言。連歌もよくし、『新撰菟玖波集』に入集している。

冷泉永宣は、寛正五年（一四六四）誕生。享禄三年（一五三〇）没、六十七歳。当時四十二歳。従三位、右兵衛督。

姉小路濟継は、文明二年（一四七〇）誕生。永正十五年（一五二八）没、四十九歳。当時三十六歳。正四位下、左近衛中将。父権中納言姉小路基綱は前年飛騨で死去。

下冷泉為孝は、文明七年（一四七五）誕生。天文十二年（一五四二）没、七十八歳。当時三十一歳。正四位下、左近衛中将。父は政為。

（3）古記録の記述から見いだせる着和歌の特徴など

甘露寺元長の『元長卿記』にはこの時の記録は欠如している。そこで、『実隆公記』永正二年三月一日条から六月十四日条までの着和歌に関係する記事を列挙する。

三月一日条 自「明後日」著和和哥御人数以下事、被_レ仰談、暫祇候、三月三日条 及_レ晩参内、著和和哥各書_レ之、御人数、

下官 民部卿 左衛門督<sub>（題者、下
祇候）</sub> 按察 小倉中納言_{（下妻）} 甘露寺中納言 源中納言 右兵衛督 濟継朝臣 為孝朝臣_{（下妻）} 各書了、於「番衆所」賜_レ盃、天酌如_レ例、（中略）著和和籤依_レ仰染_レ

筆、付「公条朝臣」進上了、

三月七日条 著到御製至「昨日」^{三首}、可「拜見」之由被「仰下」、愚意所存以「書状」申入了、(中略)「愚亭」著到人数也、至「今日」^書之、帰了、

三月八日条 又著到和哥沈「吟之」、(中略)午後参内、著到和哥自「四日」至「今日」^書之、〓 春6

三月九日条 甘露寺中納言来談、戸部卿父子、濟繼朝臣等著到和哥事被「談」之、

三月十三日条 午時参内、書「著到」、〓 春11

三月十五日条 民部卿父子来臨、著到和哥事談合、(中略)依「召参」御前、書「著到和哥」、〓 春13

三月十八日条 今日和漢御会也、(中略)漢五句、和五句宛連「之」、

及「晚終」功、其後於「御前」著到和哥書「之」、〓 春16

三月二十一日条 及「晚参内」、著到和哥書「之」、〓 春19

三月二十二日条 参「番衆所」書「著到和哥」、今日春廿首終「功」、〓

春20

四月三日条 及「晚向」勾当内侍局、「相」訪彼内侍事、「其次御著到相積分書」之了、〓 夏10・30

四月八日条 著到和哥今日夏終、仍書「之」退出、〓 夏15・35

四月二十六日条 今日終日安閑、著到和哥等詠「之」、

四月二十八日条 書「著到和哥」^{秋部今日終功}於「常御所」有「一盞之事」、

及「晚退出」、〓 秋20・50

五月六日条 早朝書「著到和哥」退出、〓 冬7・57

五月十日条 今日月次和漢御会也、仍参内、(中略)、及「晚終」功、

每事如「例」、其後書「著到和哥」退出、〓 冬11・61

五月十四日条 今日禁裏著到和哥冬部終「功」、仍参内^{下夜}書「之」、甘露寺、戸部卿等同道、〓 冬15・65

五月二十一日条 参「御所」書「著到和哥」、〓 恋7・72

五月二十九日条 及「晚参内」、書「著到和哥」、今日当番皆参、〓

恋15・80

六月六日条 早朝書「御著到和哥」退出、〓 雜7・87

六月十四日条 及「晚参内」、著到和哥書「之」、於「殿上」有「各一盞

事」、〓 雜15・100

これらの記事から明らかになったこと、或いは想定できることは、以下の通りである。

①百題の兼題(春二十首、夏十五首、秋二十首、冬十首、恋十五首、雜十五首)の出題者は右衛門督・上冷泉為広である(三月三日条)。歌題は、すべて四文字の漢字で示される趣向を凝らしたもので、珍しいものが多い。

②着到和歌の詠者順は、起日と満日(百日目)は藤次順であるが、二日目から九十九日目はランダムである。籤によって決定される。

天皇の下命で実隆が籤を作り、息子の公条に付託した(三月三日条)。実隆は自宅に詠者を呼び寄せて籤の結果を示し、各自詠者順を記録して帰ったのであろう(三月七日条)。従って、起日では藤次順にそれぞれが詠歌を書いたが、次に実隆が墨書したのは六日目の三月八日である(三月八日条)。

③天皇は、三月四日から六日までの三日分（子日催興、連峯朝霞、竹亭聞鶯）の歌を実隆に見せて意見を求めている（三月七日条）。三条西実隆は、甘露寺元長、下冷泉政為・為孝父子、姉小路濟繼と着到和歌について相談をしている（三月九日条）。凝った歌題への対応に困ったためであろうか。「沈吟」という表現もその事実が付合する（三月八日条）。

④三月八日条に三月四日より今日までの着到和歌を書くところがあるので、春の二日目から春の六日目までの五日分をまとめて書いたことがわかる。その後も十一日目に五日分まとめて書いている。夏は、十日目と最後の十五日目である。秋は不明であるが、冬は、七日目、十一日目、最後の十五日目の三回に分けている。恋と雑は、それぞれ七日目と十五日目の二回に分けている。ところで、三条西実隆がこの着到和歌で当日の詠初となったのは、写本で知る限り、三月七日（深溪餘寒・春の5）、三月十八日（雲雀消霞・春の16）、三月二十日（滝下藤花・春の18）、四月二日（連夜鵜川・夏の9）、三日（照射欲明・夏の10）、五月二十三日（寄草馴恋・恋の9）、六月五日（遠帆連浪・雑の6）、六月十日（往事渺茫・雑の11）である。初詠者の実隆は、籤で定まった初詠の日の前後に日付と歌題を墨書し、さらに自らの詠歌を記して、他の十人の詠者の記載を待った。断簡となつてゐる原本の横の寸法は、それぞれ約六十cmであるので、二番目の詠者から十一番目の詠者が順に書くのではなく、ランダムに籤で定まった場所に案配を考えて書いているのではないだろうか。想像を広げると、御製はのびのびと書かれているところから見て、初詠者

が最初に記し、次に御製があり、そして残りの空白に他の九人が案配を考えて書いているのではないだろうか。なお、実隆は春・夏・秋・冬・恋の最終日には禁裏に参内しているので、これらの日には全員が揃つて書いていると思われる。

なお、三条西実隆は、この年八月二十日から自邸で着到和歌を実施している。永正二年八月二十日起日（自「今日」百首哥始レ之）、十一月三十日満日（著到和哥今日終レ功、戸部、姉等来臨、令レ書レ之、勸「一盞」、無為無事自愛々々）であつた。参加者は、三条西実隆、下冷泉政為、姉小路濟繼、藏人頭・三条西公条、三条西公瑜（公順）であつた。江戸初期写本として国立歴史民俗博物館蔵高松宮伝来禁裏本「逍遙院句題百首（旧資料名…五玉集）」（外題靈元天皇、日一六〇〇—四六七　る函一九〇）がある。

二 原本について

現在知られる原本の断簡は、①②③の三日分のみである。

- ①三月十三日 樵路早蕨 春の11 東山御文庫蔵「着到御和歌」勅封一三八—一、『皇室の至宝 東山御文庫御物四』（毎日新聞社、二〇〇〇年）所載。縦三三・七cm、横五九・〇cm
- ②三月十九日 雨後苗代 春の17 宮内庁書陵部蔵（思文閣から購入）、「後柏原院着到和歌」、『思文閣古書資料目録』二二五号（二〇〇九年十二月）所載。縦三二・二cm、横六〇・七cm
- ③四月一日 荒砌瞿麦 夏の8 「御柏原院着到和歌懷紙」、『思文

『閣古書資料目録』二〇九号（二〇〇八年十月）所載。縦三二・九cm、横五十八・七cm

日付・歌題・最初の詠は同筆である。日付・歌題の高さは同一である。また、各詠の上端と下端の位置は揃っている（揃えるように書いている）ので、おそらく白界が施されていると思われる。紙継の上から字が書かれているので、原本は巻物であったと思われる。原本の存在により、写本で欠落している三首（②で一首、③で二首）を知ることができた。

以下に①③を翻刻し、紹介する。

①十三日 樵路早蕨

1 めつらしとおる手にあかてつま木とる
登 於 累 可 天 万 留

実隆

2 つま木とる道のゆくての早蕨や
津 累 能 佐

済継

3 ゆきかへりとるてひまなく暮にけり
布 登 能 利 流 満 個 利

元長

4 かきわくる木の下蕨おりそへて
幾 王 類 能 於 遍

真柴

5 はつ蕨もゆる深山ニおりしるや
者 徒 累 志 留

俊量

6 つま木をもおもひハすてす山人の
万 於 春 須 乃

政為

7 山柴におりそへて行さわらひの
尔 王

重治

8 けふハ又なれし妻木の道かへて
希 盤 奈 連 可 遍 利

為孝

9 かりはこふひまなき手にや真柴生る
利 者 幅 万 尔 留

季種

10 ま柴さへ暮ぬと残すやま人の
万 春 乃

為廣

11 やま人のおり残したるしたわらひ
講 乃 里 累 志 多 王

永宣

②十九日 雨後苗代

- 1 雲かゝる山や夜の間の雨ならむ流 乃 無
まかせぬ水のおつる苗代可 勢 於 留
永宣
- 2 山かせそ雲をはかへす春の田に可 勢 乃 丹
夜のまの雨ハ水をまかせて能 万 満 可 世 天
実隆
- 3 山もとのなハしろいそく雨すきて乃 奈 春
日かけにみゆる春のさとひと可 計 尔 留 乃 悲
俊量
- 4 時をしる雨の名こりのなハしろは越 志 留 乃 古 奈 路 者
水もこゝろにまかせけるかな毛 古 路 尔 満 可 計 留 可 那
元長
- 5 雨はるゝ山のみとりのかけなから者 類 見 利 能 可 気 奈 可
なハしろ水は千町にそゆく奈 路 尔 具
政為
- 6 山かけや昨日かせきしなはしろの可 気 可 起 奈 乃
水のにこりもはるゝ雨かな乃 丹 古 毛 累 可 那
済継
- 7 雨すくるなはしろ小田のみしめ縄留 奈 者 能 見
かけてや秋の露をミスらん可 天
為孝
- 8 小山田はなハしろ水の底にみし者 奈 路 乃 尔 見
濁そうかふあめのなこりに可 能 奈 利 耳
季種
- 9 をのつからなハしろ水ハますらおか可 奈 満 可
せく手もまたぬ春雨のあと満 多 乃 登
重治
- 10 坂こえて雨ハ過らん苗代や古 天
あへの田なみを餘る水をと奈 井 流
為廣
- 11 雨ハるゝ春のやま水まかせぬも累 濃 屋 万 可 毛
をのつからなる小田のなハしろ遠 能 可 流 奈
俊量

③ 四月一日 荒砌瞿麦

1 しけり行庭は草葉に荒しても
屋連 志个里 盤 尔
やつれぬ色やなてしこの花
奈 能

永宣

2 すむ人のありともますかちりならぬ
春無 能 阿利 毛万 可 奈
露やははらふとこなつのはな
屋者 婦 古 奈徒 者 那

俊量

3 嵐ふく秋いかならん露けさの
布 可 那 羅 遣 佐
いまたにたへぬ床夏の花
以万 堂 多

実隆

4 すみあらず人のこゝろもとこなつの
見 阿 須 農 古 路 毛 奈 徒 能
まかきのつゆをおもひをきけん
満可 起 能 遊 於 幾 遣

元長

5 露ふかくかゝれとてしもなてしこの
布 可 閑 連 毛 子
はなをはさしも植すやありけむ
者 那 波 春 遣

6 心して露たにかけよなてしこの
天 多 可 奈 古 乃
あらし風にもたのむかきねを
幾 丹 堂 可 子

済継

7 とこなつの花をもみれは八重むくろ
古 乃 見 連 者
はらハぬ露そ色にうつろふ
尔 徒

政為

8 なてしこのまかきにこめて猶そ思ふ
奈 古 乃 満 可 幾 尔
庭のよもきのしけきはれは
農 毛 起 志 希 阿 者 者

季種

9 宿ハ猶草にやあれん人とハぬ
王 可 乃 能 満 奈 怒
わかことの葉のやまとなてしこ
志 留

為廣

10 それとなきものとのかきねもなてしこの
奈 起 登 乃 幾 称 奈 古
花にわすれぬあハれをそしる
尔 寿 連 禮 志 留

為孝

11 したひてもたれかすむらん野々宮の
志 多 多 連 可
あとは名のみの床なつの花
盤 能 奈 乃

重治

おわりに

国立公文書館所蔵内閣文庫「着到和歌」(二〇一・一四六)の冊子は、三つの着到和歌で構成されている。最初は①永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌(詠者十六人)、次は②明応二年三月三日起日勝仁親王主催着到和歌(詠者五人)、最後は③永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌(詠者十一人)である。①は『続々群書類従』一四に「後柏原院御日次結題」として翻刻されている。②は『岡山朝日研究紀要』三七号(二〇一六年)で翻刻した。そして、③をここで翻刻した。これで、国立公文書館所蔵内閣文庫「着到和歌」(二〇一・一四六)のすべてが活字化されたことになる。①は室町期禁裏における最大規模の着到和歌であり、②は明応の政変をはさんで続けられた親王時代の着到和歌であり、③は天皇として主催した最初の着到和歌である。内閣文庫「着到和歌」は、後柏原院の記念碑的着到和歌を集めているといえる。

※『紀要』三七号「文明十二年九月一日起日後土御門天皇主催着到和歌の翻刻」の追加

○毘沙門堂門跡所蔵「着到和歌」―「二日 旅泊」―
文明十二年九月一日起日後土御門天皇主催着到和歌の原本の一つに、毘沙門堂所蔵の十二月二日旅泊がある。執事長小林祖承氏・執事石田潔氏のご好意により、二〇一七年十一月三日に調査・撮影を許された。記してお礼申し上げます。

これは、『毘沙門堂藏書目録(昭和五十四年五月調査)』の「a 函70 和歌懷紙断簡二写」に相当する。また、『岡山朝日研究紀要』に写真掲載することも許されたので、本号に原本写真を掲載する(巻末一頁)。これを翻刻すると以下の通りである。

二日 旅泊

1 そてにおち枕にかゝるうきねして

奈多も浪もかはく夜そなき

親長（甘露寺親長）

2 ありあけの月のみひとりあかし可多

ふねうつ浪に夢ハの□□て

通秀（中院通秀）
□□…虫損

3 いかに猶うきねの袖のみなとふね

もろこしまての浪とおもは、

（後土御門天皇）

4 いかにしてはしも夢をミなど舟

うら風あらき浪のまくらに

邦高（邦高親王）

5 こきとむる入江のふねの浪まくら

よるもねられぬうらかせそふく

教秀（勧修寺教秀）

紙継（現在は二紙に分離）

6 みやこおもふ袖のしほれを人ハよし

うきねのなみにまかへてもみよ

政為（下冷泉政為）

7 故郷の夢さへなしやとまり舟

そてにかたしくこのうら風

為廣（上冷泉為廣）

8 夢そなきいかりおろしてさぬれとも

猶あら磯のなみにゆられて

雅康（飛鳥井雅康）

9 舟とむる汀のなみのうきねにハ

まくらさためんたよりたになし

季熙（小倉季熙）

10 夢にてもしはしこゝろやなくさめん

□みやこをミつのとまりなりせハ

（勾当内侍・四辻春子）

11 うちねぬも我からとまり舟人の

夢のゆき来ハやすき浪ちを

實隆（三条西實隆）

12 なれなはとなくさめきてもねられすよ

あらいそ浪のよるはすからに

教國（滋野井教國）

13 松かねもこけのむしろもミる夢の

□浪のまくらにしきのふかな

（旧院上臈・三条冬子）

14 船とめて浪こす袖をおもふには

つらきかすかも野へのしら露

實淳（徳大寺実敦）

15 宮こおもふうきねの袖にうちそへて

蓬こす波そかことかましき

基綱（姉小路基綱）

この調査での最大の収穫は、旧院上臈・三条冬子と勾当内侍・四辻春子との筆跡が確認でき、十番目が四辻春子で十三番目が三条冬子であることが分かったことである。

本資料は、二紙で構成されている。文明十二年九月一日起日後土御門天皇主催着到和歌は、千葉県銚子市飯沼山圓福寺蔵の十日分の原本などから巻物であることがわかつていいる。毘沙門堂蔵のものは、十二月二日旅泊の部分だけ切断されているが、途中で貼り次がれていたため、現在は翻刻に示したように糊の部分で分かれています。縦三十四・二cm、横二十八・〇cmと縦三十四・二cm、横四九・六cmの料紙である。白界の位置は、図の通りである。この原本はうぶで、表装がされていないため、紙背が確認できた。

- 紙背には、下端に以下のような書き込みがある。
- 1の親長の詠の紙背には、「甘露寺権大納言 正二位」
 - 2の通秀の詠の紙背には、「中院内^(天)□臣 従一位」
 - 5の教秀の詠の紙背には、「勸修寺権大^(前)□□ 従^(三)□位」
- 紙継ぎ目には、「吉」の丸印が朱で捺されている。
- 6の政為の詠の紙背には、「冷泉権大納言 民部卿正三位」
 - 11の實隆の詠の紙背には、「三条西 逍遙院」
 - 12の教國の詠の紙背には、「滋の井 権中納言正三位」
 - 14の実敦の詠の紙背には、「徳大寺 大政大臣」
 - 15の基綱の詠の紙背には、「石の 治部大輔」
- それぞれ、詠者を比定するために記されたようである。従って、

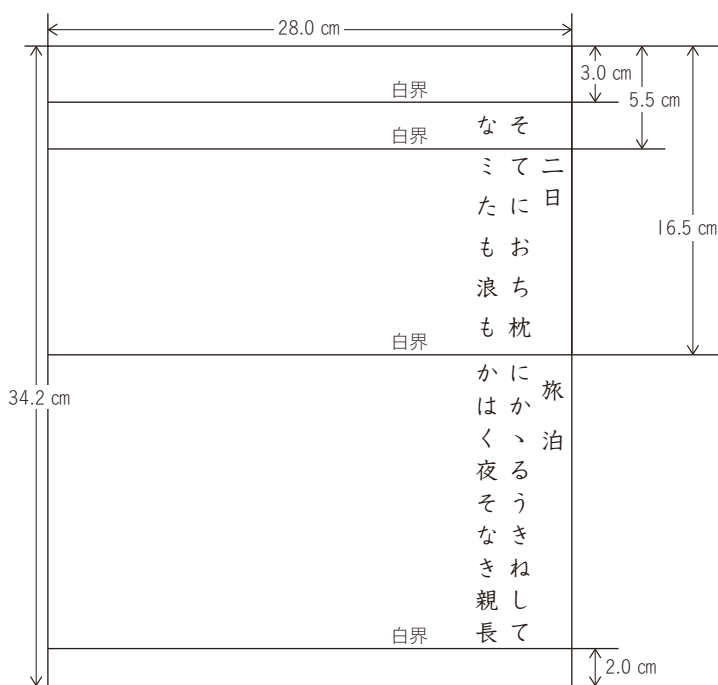


図 一紙目の白界の位置

3の御製、4の邦高親王、7の上冷泉為廣、8の飛鳥井雅康、9の小倉季熙、10の四辻春子、13の三条冬子は比定できていない。それはさておき、15の姉小路基綱の詠の比定は正しくない。石野(いわの)基綱は、江戸時代の公家である。石野家は持明院家から分かれた家柄で、基綱が治部大輔となったのは宝暦十年(二七六〇)である。従って、紙背の書き込みは十八世紀後半のものであろう。

永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌 — 国立公文書館所蔵内閣文庫「着到和歌」(二〇一・一四六) 当該部分の翻刻 —

国立公文書館所蔵内閣文庫「着到和歌」の後半部分(一七二頁以降)が永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌である。これを底本として翻刻した。これは勝仁親王が即位して最初の着到和歌で、後柏原天皇を含め十一人の詠者によるものである。春二十・夏十五・秋二十・冬十五・恋十五・雑十五の計百日で構成されている。現存している原本は、三月十三日樵路早蕨・三月十九日雨後苗代・四月一日荒御置麦の三日分である。これらの原本や五月二十七日から六月六日までの十日分現存する後柏原天皇自筆の写本である国立歴史民俗博物館所蔵高松宮禁裏本(日一六〇〇一・一六一五、ユ函二二〇)を江戸期の写本と照合してみると、この内閣文庫本は善本である。また、宮内庁書陵部「御著到部類」を対校本とした。

この内閣文庫本以外の写本は以下の通りである。

- ①宮内庁書陵部「御著到部類」、②宮城県図書館伊達文庫本「近代着到和歌」、③国立歴史民俗博物館高松宮伝来禁裏本「禁裏御着到和歌」(日一六〇〇一・三三三、ふ函八〇)。これらは、数種類の着到和歌の写しをまとめて合本にした写本集である。翻刻における注(※)での略称は、①：書、②：伊、③：高とする。また、後柏原天皇自筆の写本は、自とする。

底本は四月九日秋の二から五月二十一日恋の七までの四一日分が欠落しているが、①から③の他本も同様である。従って、これらの親本は同一系統と考えられる。

(凡例)

- (1) 月日(或いは日付)・歌題の下に、起日三月三日からの日数を記し、さらに春・夏・秋・冬・恋の各部での順を記した。例えば、五月「廿四日 寄木厭恋 80 恋の10」は、80日目で恋の部では10番目という意味である。
- (2) 各日(各歌題)に十一人・十一首あるはずである。和歌の頭に先頭から順に算用数字でその順番を記した。底本では、例えば三月五日連峯朝霞(春の3)の場合、本来十一首あるべきであるが、六首しかない。この場合、欠落している詠者を欠5人としてその名を記した。
- (3) 上の句と下の句の間を一字分空けて一行に記し、最後に詠者を記した。詠者は底本の記載通りにした。また、平仮名の字母は、右側に小さくそれを記した。
- (4) 底本の対校本である①宮内庁書陵部本には、和歌の頭に小さな変形あるは四角形の張り紙がある。それを◆で示した。
- (5) 網掛けを施した部分は、※の後に注記した。※のあとに略称がないものは、この内閣文庫本についての注である。例えば、「※こ敷」の場合は、網掛けの字の右側に記されている注書きである。また、「※ッ露」は、露がッ(抹消記号)により消されている。「※書」の場合は、宮内庁書陵部本では異なった記載である。
- (6) 後柏原天皇の詠歌は、「柏玉集」巻七(「国歌大観」第八巻私家集編IV)に収録されている。まず、「柏玉和歌集五百首上 都鄙立春」以下の一九〇六(二〇〇五)起日三月三日から満日六月十四日まで順に一括百首収録されている。但し、一九九〇の寄歌頭恋(五月二十六日)は、誤って一九八九の寄歌頭恋(五月二十九日)の次に収録されている。次いで、上記の百首が二四から一九〇三までの間にランダムにほぼ同一の和歌として重複収録されているが、一部異なる部分を持つものもある。底本では、御製は詠者不記入であるが、敢えて「御製」とし、それに続けて「国歌大観(柏玉集)」の番号を二つ記し、底本と対照して異なりがあれば、「※柏」として注記した。また、「国歌大観(柏玉集)」の二つの和歌の異なりも、※国歌大観番号：の形で注記した。
- (7) 三条西実隆の詠歌は、「雪玉集」巻七(「国歌大観」第八巻私家集編IV)のうちに「春二十首 内裏着到 都鄙立春」以下の二九五〇六(三〇四九)起日三月三日から満日六月十四日まで順に一括収録されている。詠者名(例えば実)に続けて「国歌大観(雪玉集)」の番号を記し、底本と対照して異なりがあれば、「※雪」として注記した。
- (8) 下冷泉政為の詠歌は、「古典文庫」四一八「中世百首歌」の「三、内裏着到百首和哥 永正二年三月三日(下冷泉政為)」として百首とも起日三月三日から満日六月十四日まで順に一括百首収録されている。底本と対照して異なりがあれば、「※古」として注記した。
- (9) 公家統歌研究会編『公家統歌』(和泉書院、二〇〇〇年、索引叢書四六)では、「永正二年三月三日着到和哥拔書」として、〇六三六七「都鄙立春の為広の詠歌」から〇六四八二「社頭祝世の為広の詠歌」まで一三首が収録されている。その歌人は、為廣・季種・済継・為孝が多く、元長・重治・俊量のものもある。御製・実隆・政為のものはない。底本と対照して異なりがあれば、「※公」として注記した。
- (10) 底本は秋の二から恋の七までの四一日分が欠落しているが、①③の写本や(6)⑨の刊本の情報を反映させて、可能な限り永正二年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌の全貌を提供できるように努めた。

三月三日 都鄙立春 1 春の1

- 1 八隅^志しる心の道^乃に^類くる春^越を まつ民^乃の戸^乃のことふきに^尔せん
- 2 鳥^可がなく関^乃のこ^奈なたもかすむ也 あつま^万の山^乃を春^乃や^立らん
- 3 あつま^万のやみぬ面影^毛も春^乃の立^个 けふハ都^乃の雪^万まに^尔そしる
- 4 春^乃くらし九^可かさねの内^毛も外^毛も 分^乃て嵐^个のけふは^盤の^乃とけき
- 5 なへ^奈て^个けふ春^个きに^尔けらし世^本におほふ 霞^毛の袖^越も君^毛を^尔ためしに
- 6 光^乃そふ都^乃や分^乃てけふの春^累 くるみち^能のくの奥^盤は^里ありとも
- 7 けふ^希といへハこの荒海^開 長^奈なる都^類のな^尔みに春^乃や^毛たつらん
- 8 東路^尔に今日^多たつ春^毛も九重^尔の 空^尔にか^可すある光^類と^越をしれ
- 9 あひ^飛に^尔あふ都^阿のそら^所の^能とけさ^越を 四方^尔にし^志らせて春^毛や^立らん
- 10 春^留のくるけ^个ふ九重^个の八重霞^志 八重^毛のしほ^盤も立^盤は^毛隔^毛てし
- 11 長^開かなる都^奈の外^能のうらな^奈も^毛 たち^可か^累へる春^个を^志けふ^累やし^毛らん

(御) 一九〇六二四
隆 二九五〇
※雪・越ゆ
為
為廣 六三六七
俊量
季種 六三六八
元長
重治
宣
継 六三六九
為孝 六三七〇

四日 子日催興 2 春の2

- 1 春毎^尔に千世^毛もといは^者ふこと^古の葉^乃や 子日^乃の松^耳の色^乃にそ^乃らん
- 2 世^者をいは^可ふとは^利かり野^尔へに子日^尔して うき身^幾も春^毛に引^尔心^那かな
- 3 朝日影^寸さすらへ出^乃る初^古ねこそ 松^尔にひ^可かる、心^里なり^連けれ
- 4 契^累るらし萬代^可かけて君^乃と臣^乃 二葉^乃の松^乃のひと^尔つこ、ろに
- 5 けふ^希を先^須た^盤らすは花^可のため^可しかな 小松^尔ひく野^毛に千世^可もへぬ^毛へし
- 6 子日^毛する山^乃も砌^乃の松^可たか^毛ミ 外^尔にもとめ^尔千世^可のか^毛けかも
- 7 友^佐さそふ花^毛も紅葉^毛も今^乃や此^乃 子日^乃の松^乃の春^乃のひと^本しほ
- 8 二葉^梨よりめつるや松^奈の色^尔ならん 心^尔を春^佐にさ^盤そふ子日^盤は
- 9 野^尔へみにとさ^佐そハぬ友^毛も^个けふ^尔にあ^阿ひて 松^尔にか^飛ひある契^毛を^無そしる
- 10 ◆名残^个おも^乃ふけ^能ふの子日^乃の行末^乃や 忘れ^連ぬ友^尔の千世^尔に契^無らむ
- 11 ◆心^毛もや花^尔にな^奈しなむ子日^留する 小松^可か原^乃の袖^乃のいろ

量
宣
廣 六三七一
種
(御) 一九〇七五〇
隆 二九五一
※雪・松も阿の山
長 六三七二
為
継 六三七三
孝 六三七四
治

五日 連峯朝霞 3 春の3 欠5人：俊量・季種・重治・永宣・為孝

1 遅く^{登具}とく春知山^毛も今朝見えて 霞を分る峯の白雪 (御) 一九〇八・五六

2 峯いくへあか^{可称}ねさし出る光^累にも 空おほれ^本してかすむ^{可寸}遠山 廣

3 立田山あしたの雲^多の色^能なから かすむ^可をくらの峯ぞ夜深 隆 二九五二

4 朝かすみいくへの峯^越をへたつらん ちかき^{可起}はうすき色に残りて 長

5 たれ分て今朝ハこゆらん春霞 いくへの峯も色はひとつを^毛 為 繼 〃^{耳を}

6 朝霞ひとりくもらぬ峯^李にこそ つれなき雪はあらハれ^毛にけれ 繼 〃^{耳を}

六日 竹亭聞鶯 4 春の4 欠5人：俊量・季種・元長・重治・永宣

1 朝近きねくらの竹の下風^祿に みたれてうつるうくひすの声 廣

2 鶯の羽風もいはし夢^尔のうちに 朝霧はらふ窓^乃の呉竹 (御) 一九〇九・一〇三

3 千尋あるかけにふる世^可の契り^尔をは 馴^者てもしるや鶯^毛のこゑ 為

4 あさ緑賤^可か園生^可の呉竹^毛も あらぬ春^耶なるうくひす^飛の声 隆 二九五三

5 呉竹の籬^乃の霜^乃のあさな^奈く 春にとけゆく鶯^尔のこゑ 繼 六三七五

6 春とたにしらぬ^多しのや^志の雪^乃のうちに 埋^能れはてぬ鶯^尔の声 孝 六三七六

七日 深溪餘寒 5 春の5 欠5人：俊量・季種・元長・重治・永宣

1 春とみし浪^毛もやさらに埋木^尔の 氷^能に帰る谷^累の下みつ 隆 二九五四

2 谷さむミ春^志しることをいつかハと 思ふ柴^乃やの風^者のはけしき 為

3 ◆音立し苔^毛の雫^毛もつらゝゐて 嵐^尔に結ふ春^多のた^尔にかけ 繼 六三七七

4 ◆物^尔ことに春^奈をよそなる谷^尔の戸ハ さえ^可かへる色^毛も何^尔に分らん 孝

5 谷深ミ猶さへかへる北風^尔に 雪^遣やこつけの薪^奈なるらん 廣

6 炭^幾やきし道さへたえて谷^尔の戸^尔は 春^耳のあらしに冬^毛こもりつゝ、 (御) 一九一〇・一四一

八日 水郷若菜 6 春の6 欠3人：季種・重治・永宣

- 1 摘残す里をとハ、やあす^{寸可}か川 水行末にあらふ^耳ねせり^{柊世}は
- 2 うちむれてつむ跡よりや雪消^徒の みつ野^能の若^奈な袖ハぬれつ、
- 3 ふかねせり^{可柊世}ひけハそのま、あら^満はれて 行水にこす淀^佐のさと人
- 4 磯^奈なつむ難波の里のあま衣^{阿万} はる^者の色なき袖^{奈支}のし^{志本}かせ^可
- 5 摘たむる若^{奈尔}なにそふやいく田川 水^尔のミとりも森^毛のみとりも^里
- 6 君^可か世をいは^{者多}ふためとや呉竹の 伏見^尔の沢にわか^{可奈}なつむらん
- 7 消初^累る雪まとめて里人^尔や 淀^可の、わか^那なけ^个ふし摘らん
- 8 山^{可希毛}かけも氷^希けぬらし里人^尔の あら^{婦奈}ふなつみの川波^尔の音

為 隆 二九五五
長 継 六三七八
(御) 一九二二二二
量 種 廣

九日 寢覚梅風 7 春の7 欠3人：元長・永宣・為孝

- 1 梅咲^者は枕つゆけし名残^希ある 夢^累をも香^毛をもさそ^佐ふ春風
- 2 ◆^佐さそひ^{飛徒留}つる夢^者をはいはし^者さ夜枕 猶立^可かへるむめ^留か香^毛もかな^{可那}
- 3 め覚^柊する袖^尔にものこれあく^可かれし 夢路^尔にあかぬ^可梅の下風
- 4 あたら夜を夢^尔になさ^{奈佐}しと哀^{志累}する たか^可心なるむめ^{奈留}の下風
- 5 おほか^{本可}たの春の色^{可越}かを思^{飛柊}ひねの 夢路^盤はあさし梅の下風
- 6 ◆^柊ねられ^尔めや覚^尔に夢の^毛興形^毛も 有明^{可本累}かほる梅^{志多可}のしたかせ
- 7 ◆情あれや花^春を忘れ^{飛柊}すおもひ^尔ねの 夢^毛の名残^{尔本}も梅^尔にほふ夜ハ
- 8 ◆吹風のさそ^尔ふにふか^{婦可}き情^者をは ねさ^乃めの床^耳におも^尔ふ梅か、

為 隆 二九五六
治 継 六三七九
(御) 一九二二五九
廣 量 種
※柊：二興型を消して「面影」

十日 遠浦春曙 8 春の8 欠4人：俊量・重治・元長・為孝

- 1 月かすむ^可繪嶋をミわたせは^多外に^尔春なき^奈春の^乃あけほ^本
- 2 あけほの、あらぬ姿のうき嶋や^乃霞にとを^尔きちかの^起しほ^可ま^志
- 3 立帰り二見の浦の夕月夜 今を^飛ひかりの^可春の^乃明ほの
- 4 みるめには^尔戸さしも^佐しらす^毛すまの^須浦や^万関も^毛る^留波の^留春の^留曙
- 5 鴨といふ^年ねのよそめは^盤降て来て^可霞やう^可かふ^本浦の^本明ほの
- 6 浦風に^尔猶面影の^尔霞さへ^毛明もの^毛こらぬ^毛あとの^毛しらな^毛ミ
- 7 浪か^可る^類袖や^可いかな^奈る^累おほ^本よとの^見うら^奈みな^支き^尔にも^毛春の^毛明ほ^本の

宣
※浦歌本々。伊・浦乃稿
1と2の順が逆

廣 六三八〇
(御) 一九一三・二四〇

為

種

繼 六三八一

隆 二九五七
※雪：へ

十一日 幽栖春雨 9 春の9 欠2人：俊量・元長

- 1 たへて住人は^盤蓬か^可おくの^尔庵に^尔糸くり^寸出す^寸春雨の^寸そら
- 2 いつと^奈なく^可かれぬ^留る^留宿の人^尔めには^盤か^可はる^留や^留木の^留め^留春雨の^留空
- 3 蓬生も^毛下も^毛えわた^多る^流る^尔雨に^古こそ^佐さ^寸す^可かな^奈る^留身の^留春を^志し^利り^个けれ
- 4 尋むへきたより^李有とも^毛草の^毛原^个け^盤ふは^万たの^万まぬ^万春雨の^万宿
- 5 所えて霞も^毛とつる^累八重^累律^累心には^耳はれ^者ぬ^者雨そ^者さ^者ひ^者し^者き^者
- 6 すむと^多たに^多思ハ^多ぬ^多程の^者軒は^尔にも^尔春雨^尔降て^尔おつる^尔玉^尔水
- 7 いたつら^徒に^尔ふる^尔を^越思ひ^飛の色^乃の^乃ミや^乃宿に^尔そ^飛ひ^飛行^飛春雨の^飛空
- 8 何事を^飛思ひ^飛残さん^尔柴の^尔戸に^尔雨打^可かす^可ミくら^可す^盤春日^盤は
- 9 よも^毛きふに^尔降としも^毛なき^奈春の^文雨は^盤音^世せぬ^世人の^世心を^世やし^類る

廣 六三八二
※公：春の明ほの

種 六三八二
隆 二九五八

繼

(御) 一九一四・二〇一

宣

孝

治

為

十二日 月前帰鴈 10 春の10 欠2人・元長・重治

- 1 行鴈の名残もさそな春の夜の 都の月をおもかけにして
2 かすむをそをのかかことの春ならん 秋やハ鴈の月にわかれし
3 ◆別路の涙もをのか心にて 月やうらみぬ春のかりかね
4 思ひ立をのか春とてかすむをも かこたぬ月の天つかりかね
5 天つ鴈かすめる月をしるへにて 越路の春はまちやわふらん
6 せんかたもなミたの月をおほろ夜の 名残になして厂や行らん
7 風かほる花の都の月ミても うき帰るさとりやなくらん
8 ◆なくさめて月も残るか行厂の 面かけしたふあとの山のは
9 名残思ふ雁の鳴音もさたかにて みをくる月のかすまぬもうし

量 隆 二九五九
継 六三八三
為
孝
廣
種 六三八四
宣 ※公・行
(御) 一九二五二〇

十三日 樵路早蕨 11 春の11 原本が東山文庫にあり

- 1 めつらしとおる手にあかて爪木とる 道さまたけのはつわらひかな
2 爪木取道のゆくての早蕨や 外にもとめぬ春のやまさと
3 行帰りとるで隙なく暮にけり 麓の爪木峯のさわらひ
4 かき分る木の下蕨折そへて 真柴露けき道やくるしき
5 初蕨もゆる深山におりしるや 花咲木をは分ぬ木こりも
6 爪木をも思ひは捨す山人の 心をうつす峯のさわらひ
7 山柴に折そへて行早蕨の もえて煙は立としもなし
8 けふは又なれし妻木の道かへて おりやまとハむ峯の早蕨
9 かりはこふ隙なき手にや真柴生る 山路の蕨折のこすらん
10 ま柴さへ暮ぬと残す山人の おる手みせたる峯のさわらひ
11 山人の折残したる下蕨 薪の道やひまなかるらむ

隆 二九六〇
継 六三八五
長 ※公・つ
(御) 一九二六三九九
量
為
治
孝
種
廣
宣

十四日 垂柳蔵橋 12 春の12 欠1人：重治

- 1 よそにみは中や絶なん青柳の 陰ふむ道の遠きかけはし
所尔見者 奈 布
- 2 青柳の陰もふりゆく橋のうへに 苔のみたれて春風そ吹
毛布利 尔 多
- 3 くる人の渡りやかぬる青柳の ミたる、門のまへのたな橋
可 多類 乃満 奈
- 4 青柳の糸のたえまもよる浪や あらぬみとりの春の河橋
満毛 累 梨 能
- 5 青柳のかつらき山か絶々の みとりにかゝる水の岩はし
可 可 尔 乃
- 6 河風よいかにかにわたらん青柳の 糸にかゝれる水のうきはし
可 多 尔 支
- 7 枝おほふ柳をはらふ川風や かけてミせたるまへのたな橋
本 可 希 多留満 奈
- 8 駒の足の音けして青柳の 煙に沈むまへのたな橋
乃 計志 耳 多那
- 9 行人もなれとハ見えず青柳の 木の間分入宇治の川はし
毛奈 乃 者
- 10 陰ふかくみたる、糸に末絶て 柳にかゝる宇治の河はし
布可 多 尔 累

継 (御) 一九二七・一八三
量 為 孝 隆 二九六一
種 廣 長 宣

十五日 対花恥老 13 春の13 欠2人：重治・為孝。為孝の歌は公宴続歌にある

- 1 いかにせんめてこし春の積りきて 花に見えける老の姿を
可尔 古 能 尔 个
- 2 つれなしと今年も見えん老はうし あたなる花よさそ思ふらん
奈 毛 難 多奈
- 3 さらに又松のおもはん身のほとを 花の上にもなけきてそみる
佐尔 毛者 本 尔毛奈 類
- 4 我そうき散もさかりの色香にて 花の上には老やなからん
毛 佐可 梨 尔 尔 奈可
- 5 よそに見てわか身ひとつと歎そよ 花も老木ハ有世なれとも
尔 可 毛 奈
- 6 人めこそあかぬ心にわするとも 花のおもはん老の身ハうし
古 可 尔 毛
- 7 老となる身をは忘れぞ深山木の 姿も花のすかたならすや
那留 乃 毛 可多奈
- 8 物いはぬ花もはつかし老の身に 頼て契るゆくすゑのはる
者 者 可 尔 尔 者 留
- 9 年をへて人もすさめ身のほとや 花に露けき森の下草
寸 本 尔
- ・ なりぬるも花やはいとふ陰にたに たか老のみを思ひわふらん
孝 六三八七

量 為 隆 二九六二
種 宣 廣 六三八八
長 継 六三八九
孝 六三八七

十六日 花落客稀 14 春の14

- 1 散ぬれは都の宿のかひもなし 可飛 奈 満 まして太山の花の名残よ 乃
- 2 花ちれハ身をしる春をいかにも 思ひをこせよ待人ハなし 奈
- 3 問人もわかためならぬ情をは 思ひしれとて花や散らむ 無
- 4 やかてはや人にかれゆく 香をとめてとひこし花の散し木陰ハ 飛古
- 5 散花のつらさ閉むる桜戸を たゝく物とは山風のこと 堂 盤 古衛
- 6 花ゆへにとひこし人の情をも 散ぬる跡に思ひしれとや 飛古 飛志
- 7 花よりも人をそ春に恨まし 散あへぬうちにとハす成ぬる 与 李 裴 越 地 飛 奈 満 留
- 8 花にこし都の人はとひ絶て 青葉の枝にやま風のこと 乃 古 飛 乃 古 衛
- 9 ちらぬまは花にのミともいはさりし 身をさて人のいつ忘けん 盤 飛 毛 者 佐 里 个
- 10 ちる花の雪にも跡はいとふ身の とハぬを何に恨てかみむ 尔 盤 耳 可 無
- 11 心あらはなくさめきても 散跡をとハゝとふへき花のふるさと 者 奈 登 佐

(御) 一九一九三七四
為
宣
種 奈 書・伊・高・そ
廣
量
隆 二九六三
長
繼 六三九〇
孝
治

十七日 晴天遊絲 15 春の15 欠1人：重治

- 1 何に染る物とかいはむ糸ゆふの 空はみとりの色に乱れて 者 無 李
- 2 萌出る草にもあらぬ糸遊ふも たゝ春の日の空を色なる 毛 堂 能 奈
- 3 おほ空の霞の衣はつれ行 色をやあそふ糸に見すらん 保 尔
- 4 曇なき影にも猶やまたるらん 入日の中にあそふ糸ゆふ 奈 支 尔 乃 耳
- 5 たちぬはぬ錦おり出て緑なる 空にあやなす糸ゆふのかけ 堂 者 怒 奈 留 尔 奈 可 希
- 6 何ならぬ春のけしきの糸ゆふハ 日影をおのか姿とやみん 奈 乃 个 起 可 希
- 7 ◆染なして思ひ分へき色もなし 空の緑の糸ゆふのかけ 奈 飛 毛 奈 可 希
- 8 何ハかり心の色に分てミむ なきたるあさの糸ゆふの影 可 里 乃 尔 奈 多 能
- 9 長かなる緑の空の糸ゆふや かけて入日の影のこすらん 閑 奈 可 乃
- 10 さほひめのをのか手染の糸ゆふや なきたる空の緑ミすらん 保 能 可 奈 支 多 留

(御) 一九二〇二四三
隆 二九六四
宣
長
為 奈 古・やを 奈 古・成 覽
繼
孝
種
廣

十八日 雲雀消霞 16 春の16 欠5人：俊量・重治・永宣・元長・濟繼

- 1 あかり^{可李}ゆく空^{古阿}こそあらめ夕^者ひはり 影^可みる水もかすむのへ哉
- 2 かすむ^可目^李ハ跡なき空^{奈支}の夕^{飛者利}ひはり 遠^{佐可}さかるたにさたかならぬを
- 3 雲路よりくる、末野の夕雲雀 馴し霞も猶やたとらん
- 4 ◆しられめ^志や声^尔に聞^可すハ夕雲雀 霞^幾の空にきゆる行^{衛毛}ゑも
- 5 空遠^可ミかすむ姿^{盤可}はかけろふの をのれ見^可わけぬ夕雲雀哉
- 6 絵にかける鳥とやそらに夕雲雀 おなし所にかすむ声哉

廣 ※書・伊：御製
一九二一・三九一

十九日 雨後苗代 17 春の17 欠1人：俊量 原本が宮内庁書陵部（↑思文閣）にあり

- 1 雲か、るやま^流やよのまの雨ならん まかせぬ水のおつる苗代
- 2 山風そ雲を^{者可寸}はかへす春の田^尔に 夜^乃のまの雨^盤は水^{可世}をまかせて
- 3 山本の苗代いそく雨過て 日影^尔にみゆる春^{佐飛}のさとひと
- 4 時^{志累乃}をしる雨の名残の苗代ハ 水^毛も心^{満可}にまかせけるかな
- 5 雨^留はる、山^{李乃}のみとりの影^可なから 苗代水^盤は千町にそゆく
- 6 山^可かけやきのふかせ^可き苗代^可の 水^毛のにこりもはる、雨^{可那}かな
- 7 雨過る苗代小田のみしめ縄 かけ^可てや秋の露をミすらん
- 8 小山田ハ苗代水の底^尔にみし 濁^尔に^可うかふ雨^{奈利尔}のなこりに
- 9 を^可のつから苗代水^{満寸}ハますらおか^可 せ^世く手^{満多}もまたぬ春雨の跡
- 10 坂こえて雨^古ハ過らん苗代や あへ^井の田^留なるに餘^可る水音
- ・ 雨^累ハる、春^{濃屋万}のやま水^可まかせぬ^毛も を^{遠能可}のつからなる小田^奈のなハしろ

俊量 ※原・書・伊・高：そ
廣

廿日 滝下藤花 18 春の18 欠3人：俊量・重治・元長

- 1 落瀧つよとむ瀬もなく行春を われせきかはにかゝる藤波
- 2 陰たかき藤のしなひも瀧の糸の 乱ておしきはるの山かせ
- 3 おちたきつ岩波くたくゆかりそと 色にもミせて藤咲にけり
- 4 ぬきとむる花とやみまし瀧の糸の おなし岩ねにかゝる藤波
- 5 落瀧つ岩根をこゆる藤波の 花にミかせハマさるともなし
- 6 紫の色もあらはにおちたきつ 岩ねの水を染る藤かな
- 7 家つとにたれ行ならし水引の いともてゆへる瀧つ藤かえ
- 8 おちたきつ岩さる水ハさはけとも かけしつかなる松の藤波

隆 二九六七

(御) 一九三四一〇
※柏を

為

継

孝

種

廣

宣

廿一日 款冬露繁 19 春の19 欠1人：季種

- 1 露をたもみ風なき枝もゆり金の 色はつかしき山吹の花
- 2 山吹にけさをく露のなかれてハ 爰にやくまんゐて玉水
- 3 なをさりにしほりてもみようつろハ、 われも散なん露の山吹
- 4 おる袖の露の時雨も山吹の 下葉はしらぬいろにつれなき
- 5 みるまゝにをきそふ花の夕つゆは 八重山吹のいくへ共なし
- 6 吹色にうつる心かをくつゆも けにいひしらぬ山ふきの花
- 7 山吹の露ともちるやしからミに せかれてあまるゐての川波
- 8 植置し情わすれす古郷の 庭につゆけきやまふきの花
- 9 をく露の心のおくにさきてけり これやいはての山ふきの花
- 10 花の外にこほれ出ても山吹の しけみの露の匂ふ色かな

長

為

継

孝

隆 二九六八

宣

治

量

廣

(御) 一九二四四〇三
※柏：本

廿二日 惜春非一 20 春の20

- 1 いかにせんけふさへいくれつ花鳥の色ねのこらぬ春の別路
- 2 ことにふれて名残は有を花鳥の名にたちて行春のならひに
- 3 行春に思ひそへてかおほかたの月日も更におとろかれぬる
- 4 かきりありと暮行春をみるに猶 哀数ぞ身をや思はん
- 5 ものことにあかすかさへて百千鳥 ねも立つへき春の別路
- 6 なへて世の月日もかなし花も惜 我身ふりゆく春の暮かた
- 7 あり明に春のひかりをのこしても 木ふかき花のいつくにかミン
- 8 そをのミや名残ときかん甘あまり 四方にうつろふ花の春風
- 9 なれきつることをあまたに思ふにも つらきハ春の別なりけり
- 10 花鳥の色音に残る面影の それもとまらする、春哉
- 11 ◆なをさりにしたはん物か花かほり 有明かすむ春の名残を

長 為 ※古にて 継 孝 種 隆 二九六九
※当イ…春。暮がたの空
※柏…を
(御) 一九二五四一四

廿三日 山家更衣 21 夏の1

- 1 山住も身のならハしにたちかへて 浮世にかへす夏衣かな
- 2 人なミにかふるといふもかひなきや かつ山住のあさのさ衣
- 3 いつよりか鳴は軒はの山ならん けふは我きし蟬の羽衣
- 4 春夏の色をはかへつあさ衣 独りいは木の山かつもなし
- 5 いかて世の花にもそめぬ苔衣 たちかふる身のならひしるらん
- 6 春とても花にしあらぬ山賤の 袖やかふるも惜まざるらん 治
- 7 一たひは苔にそ袖をかへつらん なに山すミの夏も分へき
- 8 山里は人もしらしを夏衣 残る桜のいろにそめはや
- 9 柴の戸に春をもしらぬ身のうさハ かへもおなし麻衣かな
- 10 心さし花に染すは山賤の かふる袂も何かおしまむ
- 11 かふるとも何おしからん山住の 心は花にそめぬころもを

宣 長 廣 継 治 隆 二九七〇
※伊イ…な
※伊…き
(御) 一九二六四四〇

廿四日 卯花作牆 22 夏の2 欠2人：俊量・元長

- 1 咲比はた、卯花の陰にして 可飛尔 かこひ置にし草垣もなし
- 2 蘆の屋のかきはにたのむさしうつ木 能可文尔 花のためとも思ハさりけん 多毛
- 3 陰たかく咲卯花や冬籠る 可留 雪の垣ほを爰に見すらん 本尔
- 4 荒行は垣ほともし卯花の 盤本 雪こそ日人のあと隔けれ 古个禮
- 5 おもふへき春の人めは枯果て 幾 垣はもあやな卯花のかけ 本毛阿奈
- 6 山風の吹とはすれと卯花の 盤 雪のかきねははらふともなし 可本盤奈
- 7 面かけは雪になひかぬ色もなし 可盤尔奈飛可 卯花垣ね竹のしたかせ 年志多可
- 8 卯花のさきてかこへる古郷の 起可 垣ほ計ややつれさるらん 本屋累
- 9 あかさりし梅も桜も卯花の 阿李 垣ねにかへる春の色かな 本尔可那

宣 長 為 継 孝 治 隆

二九七二

(御) 一九二七 四四八

廿五日 夢中郭公 23 夏の3 欠1人：元長

- 1 一声におとろかされてあたら夜の 可阿多 夢にもうとき時鳥哉 尔毛
- 2 わすれすよいかにねし夜そほと、きす 可尔 うつ、に残る夢の一声 徒尔累
- 3 うつ、かと聞し初音も思ひねの 可毛 夢路にかへる山ほと、きす 尔可遍本支
- 4 聞つるを人はいかにとほと、きす 可尔本 誰にとひてか夢をさためむ 支数無
- 5 後もまた夢をやまたんねぬ夜をは 毛満多 いたつらになす山時鳥 徒尔奈
- 6 うつ、かとおとろく夜半の時鳥 徒可 したはてさめし夢もはかなし 志多佐毛可奈
- 7 時鳥夢なりけりと空の雲 奈里 たなひくいろにのこる聲かな 多那飛耳可奈
- 8 ねぬ人のよそにも聞ハほと、きす 本毛 夢になしつる一声もなし 尔奈徒留毛奈
- 9 思ひねの初音なりせはほと、きす 飛本 心とさむる夢はあらしを 留盤
- 10 待わひてねぬる心やみしか夜の 飛本 夢をおとろくほと、きす哉 本

量 種 廣 継 為 孝 治 宣 隆

二九七二

(御) 一九二八 四七〇

廿六日 蘆橘薫枕 24 夏の4 欠1人：元長

- 1 夜と共に匂やさそふぬるたまも 枕^可うる、軒^多のたちはな
- 2 梅^可か香に月やあらぬといひし夜を 花橘^毛も枕^尔にそとふ
- 3 橘や身もふりにける手枕を よそにおもはてにほひきぬらん
- 4 橘の代々のむかしをたかために つけ^希の枕^能の香に匂ふらん
- 5 忘れや枕定て夜もすから なる、とこよの花の^尔にほひは
- 6 あたにまた枕^多もかへし橘の 匂^尔ひになる、床^乃のひとりね
- 7 身にとまるおもひやむかし橘の 匂^尔ひにぬる、さ夜の手枕
- 8 夏の夜は花橘^盤のにほふより 枕^佐ためぬ端^多あをやせん
- 9 橘の匂ひ計や花らくの 枕^尔にかへるむかし^奈なるらむ
- 10 袖^可の露もあかぬ匂ひや散すらん 枕^尔にすくるかせ^累の橘

廣 繼 為 種 量 孝 隆 (御) 宣

六三九二 六三九二 二九七三 一九二九四七九

廿七日 古池菖蒲 25 夏の5 欠1人：重治

- 1 あせにけりもとの根さしの残^盤らすは 池^尔のあやめも何^可にわかれん
- 2 池水^可ハかほるあやめを心^尔にて をのかさ月^可を幾世^遍へぬらん
- 3 いくとせかなき例^可にひかれけん ふりぬる池^尔に生ふるあやめハ
- 4 引人の影もふりゆく池水^尔に おふるあやめの色^可そかハラぬ
- 5 茂^利りあふあやめ引手^尔に見え初て 隙^累ある池の水の涼しさ
- 6 池や猶心あさくもあせぬらん ひけ^盤はあやめのな^奈き根^可さしに
- 7 われのミそうきぬの池^乃のふりぬれと け^希ふのあやめ^阿ハ人もひきけり
- 8 池水^毛も心^届ふかくはあやめ草^盤 たか世^可のたね^株ととふもこたへし長
- 9 袖^尔にみし宿^毛の昔も池水の 心^耳にかゝるあやめ^累なりけり種
- 10 古残る池の姿^乃の松^可かけに あやめもとのね^株さしミセけり

繼 為 量 孝 宣 (御) 隆 廣

六三九三 六三九三 二九七四 一九三〇四九〇

廿八日 薄暮早苗 26 夏の6 欠2人：元長・季種

- 1 入迄と取^手たとらぬ夕月に^尔 早苗ふミしたく道ハ分れす^{志多}
- 2 夕日影さすや岡邊の早苗とる^類 田子のもすそやぬれてほすらん^{能毛}
- 3 暮行ハわかた遠き小山田の^{可多} たこの早苗や猶いそくらん
- 4 植立てミれは早苗の夕風に^{者尔} やかて葉のほる露の涼しさ^可
- 5 打なひき色^{奈飛支古}こき雲の秋もいさ^毛 緑のなへの露の夕風^{奈乃}
- 6 暮深ミいきもつきあへす湊田に^{毛徒尔} かつきのあまりとる早苗哉^{阿梨}
- 7 早苗とり帰る田面にたつ鷺の^{李尔多} をのか色のミくち残りつ、^{可可}
- 8 くる、日にしゐてもとるや水なへんの^{尔志} 緑ふし立早苗なるらん^奈
- 9 暮渡る小田の早苗ハ見えわかて^可 葉の出る露そ光そひ行

為^{※古を} 量 孝 隆^{二九七五} (御)^{一九三二・四八九} 廣 繼^{※れカ。書れ} 治 宣

廿九日 船五月雨 27 夏の7 欠1人：季種

- 1 波の上ハかきり有へき舟路にも^{可梨} 山の端しらぬ五月雨の比^{尔志}
- 2 とす火をさミたれくらき舟にミて^{佐多} 藻塩の煙たき絶にけり^{尔个}
- 3 あらぬかたに川波こえて舟のよる^{可多尔古} 汀やかハるさみたれのころ^古
- 4 舟人ものほる瀬しらぬ五月雨の^{毛本類志} 雲の行ゑや猶たとるらん^{乃衛}
- 5 五月雨にあまの綱手や朽ぬらん^{尔万} さらぬ小舟もこかれてそゆく^{可毛}
- 6 五月雨はみさこゐるすもミつ塩を^{整毛} またてや舟のなかれ出らん^{満多奈可}
- 7 き、なれし草の庵の五月雨を^{奈尔乃} 管おほふ舟も何かうれへん^{本毛可}
- 8 引おふとまの雫も晴やらて^{本滴毛} 五月雨くらきふねのうちかな^{起年可奈}
- 9 船の中ハかゝらぬ波の雫にも^{可尔} かハかぬ袖をさミたれのそら^{可可}
- 10 すかこもの十蒲の浦舟みふにさへ^{可古毛三婦尔} ねんかたなしや五月雨の比^{可多奈}

(御)^{一九三三・五〇三} 為 量 孝 隆^{二九七六} 宣 長^{※々に} 治 繼 廣

四月一日 荒砌瞿麦 28 夏の8 欠2人：元長・俊量

原本が思文閣古書資料目録平成二十年十月二〇九号に確認される

1 茂^利り行庭ハ草葉にあらしても やつれぬ色やなてしこの花

宣

2 嵐吹秋いかならん露けさの 今たにたへぬ床夏のはな

隆 二九七七

3 露ふかくか、れとしてしも撫子の 花をハさしも植すや有けん

(御) 一九三三五四〇

4 心して露たにかけよなてしこの あらき風にも頼む垣ねを

継 六三九四

5 常夏の花をもミレハ八重葎 はらハぬ露そ色にうつろふ

為

6 なてしこのまかきにこめて猶ぞ思ふ 庭のよもきの茂き哀は

種

7 宿ハなを草にやあれん人とハぬ 我ことのほのやまとなてしこ

廣

8 それとなきもの垣ねも撫子の 花に忘れぬ哀をそしる

孝

9 したひても誰か住らんの、宮の 跡ハ名のミのとこなつの花

治

原本により、二首を補足する。綾小路俊量の詠歌は、1(永宣)と2(実隆)の間に。

・ 春^無農^阿毛^可すむ人のありともますかちりならぬ 露^屋やははらふとこなつのはな

俊量

甘露寺元長の詠歌は、2(実隆)と3(御製)の間に。

・ すみ^見阿^須農^古路^毛なつもの まかきのつゆをおもひをきけん

元長

二日 連夜鵜川 29 夏の9 欠1人：重治

1 夕月夜あかつき月のよな^奈にいくたひ^多かへて鵜舟さすらん

隆 二九七八

2 うか^可ひ舟いく夜かくたすおなし瀬に^奈いかなるあゆの猶のかれけん

長

3 月にはと帰る鵜舟も時かへて 夕やミふくるありあけのころ

宣

4 鵜飼舟うらみて帰る月影も おなし川瀬にいく夜見つらん

継

5 みしやその弓張月の下つ瀬に^奈今いく夜とか鵜舟さすらん

(御) 一九三四五五〇

6 うか^可ひ舟うかふや波のよること^奈にとくもをそくもやミを待つ、

種

7 鵜^可かひ舟夜かれも見えずさすさほの^奈雲に露の身をはしらすや

孝

8 最上川夜半も幾瀬の波分て^奈のほれはくたる鵜舟なるらん

廣

9 篝火のてらすもうしと心せよ 鵜舟はやミのひと夜のミかは

為

10 月の入猶待えつ、にし河や 波のよるへ鵜舟さるらし

量

三日 照射欲明 30 夏の10 欠1人：俊量

- 1 ともしさす松の煙もあくる夜の^毛 色に^可わ^可かる、嶺のよこ雲
- 2 あけ残るほくしのかけやさほ^可しかの^本よりこぬ程をよそにミすらん
- 3 ほくし^本さす煙や峯に明ぬらん わかるゝ^可あとに^可のこるよこくも^毛
- 4 夜をのこす雲一村の峯たかみ きえぬ^毛ともしの影そまかはぬ^{満可者}
- 5 よる^{類志可}しかの面影もみむともし^毛して 残らぬ夜をや空にかこたん^多
- 6 明にけり^可よりくる鹿もなつ山や 残るほくしのまつとせしまに^{累本}
- 7 五月山さつ男のゆつる一すちに 明かた^可かけてさす^可ともし^可かな^可
- 8 たき^支すつるともしのほかけしらむより 明る夜いそく嶺の横雲
- 9 明るか^可とみるも木ふかき山路^可には 残るともし^毛や^志しるへ^{奈流}なるらん
- 10 ともし^毛する尾上のほかけ^{本可}残る夜に^可 めくらぬ星や空にミすらん^可

隆 二九七六

治

宣

継

為

種

廣

長

孝

(御) 一九三五五五三
※普・伊・柏・ゆ

四日 螢照水草 31 夏の11 ※伊の順は、1・3・5・7・9・10・11・2・4・6・8

- 1 露す^可かる玉江の芦に飛^可螢 ミかく光そみえてすかしき^可
- 2 声たてぬ夜の螢のおもひをも^毛 芦の葉風のそよとしれとや^{志登}
- 3 行か^可たの光のうちに色見えて^可 螢もさそふ水のうき草^{毛佐}
- 4 い^{以徒}つくよりさそふ水ありて浮草に^梨 よるは^{累盤}螢のミたれあふらん^多
- 5 飛^佐螢さそは^可れきても浮草に^可 おもひ^可みたなし水のうへ^可かな^可
- 6 数々^可にもゆる螢のな^可かれ藻に^可 水のくもりもミセぬ夜半^可かな^可
- 7 水くらき^起芦間かくれに先見えて^可 夜の螢もくれ^能こと^可のかけ^可
- 8 橋姫のけ^多たむ思ひのうち川や^可 すか藻ミたれて螢とふらん^可
- 9 やとり^可つる螢の影はけさ消て^可 はかなき露を残す^可うき草^起
- 10 沢水のな^可かれぬ草にかけとめて^可 よそにや過ぬ螢^{奈累}なるらん
- 11 夜もす^可から浪に乱て行^可螢 そこの玉藻もひかりそふらん^可

隆 二九八〇

治

宣

量

継

為 ※古：は

(御) 一九三六五七二

廣

長

孝

種

五日 隣蚊遣火 32 夏の12

- 1 打煙竹の末葉の夕風に たてぬ軒はも蚊遣火のかけ^{者毛}
- 2 よそにても哀しれとや夕煙 むせふ計に蚊遣たくらん^世
- 3 暮にけり我しもたかぬ蚊遣火の 煙もむせふ色をそへつ^徒、
尔个李 志毛 可
- 4 はらへとも煙隔てぬ蚊遣かな われこそたかねおなしふせやに^尔
毛 徒 可 奈
- 5 下もへや人のためまでつらからん 宿にふすふる蚊やりならても^毛
毛 多 満 徒 可
- 6 今そふき吹かふ風になひきゝて よその煙をやとのかやり火^可
可 尔 飛
- 7 したくゆる蚊火の煙もかのごゑも ともにこえくる宿の中垣^毛
志多 留 毛 可 尔 古 累
- 8 中垣の竹の煙も立そふや 身には絶せぬ賤か蚊やり火^可
毛 尔 盤 世 可
- 9 隔ても心もとなきかひまみの 隙をかやりの煙にそしる^類
毛 奈 支 可 飛 満 可 梨 尔
- 10 夕かほの花やす、けんわか宿のそとにちかく蚊遣たく也^多
可 本 个 可 毛 尔 可
- 11 かれもさハ今たきそへて蚊遣火の 煙はよその名にもたてしな^奈
毛 盤 尔

宣 量 継 為 隆 廣 種 長 治 孝

※書・伊・雪…え
二九八一

(御) 一九三七五五六

六日 遠村夕立 33 夏の13

- 1 嵐吹雲ハ嶺行夕立に 入日かけろふやまもとの里^乃
尔 可 希 屋 万 毛
- 2 此里も雲と、ろくなる神の こゑはのとかに過る夕立^{可 尔}
毛 奈 古 盤
- 3 行と見て雲はかへらぬ遠里の夕をいそくゆふ立のそら^{可 爾}
盤 可 遍
- 4 鐘の音も隔つる雲の夕たちや 暮行色をよそにミすらん^尔
多 毛 古 尔 本 飛
- 5 雲風にさハく遠地の村鳥も こゝにきほひて夕立の声^毛
尔 佐 累 本 奈
- 6 山風もたか里めくるほとならし 時雨てはるゝ夕立の里^可
毛 可 尔 者 類
- 7 雲もまたゆきゝさためぬ夕立に 遠かた人や道まよふらん^{可 多}
毛 多 佐 多 尔 満
- 8 降きはふ遠地の里の夕立に 帰るさいそく三輪の市人^耳
乃 尔 耳
- 9 いく里に降つくしてか夕立の 末もとをらす雲は消らん^盤
尔 徒 可 須 盤
- 10 過るかといて見の原の夕立や 遠里をのゝ雲の一むら^{可 尔}
可 乃 乃 可 尔 奈
- 11 通路は遠地の里の夕立も まちかく音になる神の空^{可 尔}
盤 乃 毛 満 可 尔 奈

宣 継 量 為 隆 孝 治 長 廣 種

※書・伊…に
二九八二
六三九六

七日 樹陰納涼 34 夏の14

- 1 涼しさに時をうつして日くらしの 声さへあかぬ森の下かけ^希
- 2 あつき日をさふるはかりのたよりにも とふへきものを松の下風^毛
- 3 風の音は松に絶せぬやとりそと いふ計なるかけの涼しさ^可
- 4 涼しさをしたふ心や色に出む 秋をもまたぬ松陰にして^尔
- 5 しろしらす夏の日くらす跡見えて 草を冬の、森の下かけ^{可希}
- 6 陰深ミ分行からにあさかしは むるや袂の露の涼しさ^者
- 7 しろしらすおなし木陰の涼しさに いく夕暮の友となるらん^奈
- 8 茂りあふ木陰涼しき苔筵 色なき露に焔風そふく^婦
- 9 立よればいく田の森の陰深ミ こぬ秋風もとふ計なる^{奈累}
- 10 音に聞音にきかても涼しさハ 風を忘れぬまつの下かけ^{可希}
- 11 鳴たつも霜夜の声やかよふらん 空に夏なき松の下風^奈

宣 継 量 為 (御) 廣 長 治 孝 種 隆
二九八三

八日 瀬荒和祓 35 夏の15

- 1 焔にこそやかて逢瀬の川ならめ 夏行水にけふ御祓して^{尔个}
- 2 白波のたつ程もなし夏衣 袖つく水になかすあさせは^{勢盤}
- 3 人の世のうき世もさそと御祓川 やすたも波ハこえて過けり^个
- 4 芳野川としの早瀬のいくとせか 古郷人もみそきしつらん^志
- 5 うかふせといのる物から御祓河 いくとせおなし波もこえけん^个
- 6 面影もせ、こす波にうかひけり 御祓にしけき人のゆき、は^盤
- 7 渡る世の思ひの洄もあすか川 せにかはり行御祓ともかな^{毛可那}
- 8 乱もになかれてとまる麻のはの しからミうくる世、の白波^{志可}
- 9 うかふ瀬にあははと計いくとせの かはらぬ浪に御祓しつらん^志
- 10 御祓する川瀬に花のなミよせて ことしも又や半過けむ^{个無}
- 11 今も猶ミそきは更にさためなき 見たらし川の瀬々の面影^多

量 為 隆 (御) 種 廣 長 治 宣 孝
二九八四
※2等?などイ
一九四〇・六〇八

九日 初秋朝露 36 秋の1

御製一首と、上の句の五七部分の一首のみ

1 初風も吹きあへぬほどの朝露に 聴 ぞめぬ一葉のもろきいろかな 可奈

2 袖を 毛 もわかし秋といへは 者

以後、五月二十二日 寄垣通恋 恋の8まで、内閣文庫本などの写本では欠落している。そこで、御製は「柏玉集」、実隆は「雪玉集」、政為は「権大納言政為卿着到和歌」、済継などは「公宴統歌」に見えるものを収集掲載した。

四月九日 36 初秋朝露 秋の1

草も木も秋風たちぬあはれ又 あしたの露のみをいかにせむ
いかにねし身をおとろく床のうへは 秋くるよるの露に明ゆく
如何に見て秋ともいはん今朝はまた よのまの露の同光を
置そめて今朝はほとなき露のまと 見るたにあるを秋の行末

実隆 二九八五

政為

済継 六四〇〇

為孝 六四〇一

四月十日 37 霧織女衣 秋の2

衣衣のうきせよいかに天の河 夜ぶかき霧のたちかさねても
から衣むねのおもひを七夕の いく秋ぎりにたちかさぬらん
秋きりや猶かさぬらん星合に たつ色うすき雲の衣を
たちぬはむ衣かさねて雲霧も ゆたかにおほふ星合の空
袖つかん夜半の衣とうす霧の たつらん物かほし合のそら

(御) 一九四二・六四七
実隆 二九八六

政為

季種 六四〇二

為廣 六四〇三

四月十一日 38 萩風似雨 秋の3

※柏六六五：如

夕月夜いおせさそふる雨の音に 立出でてみれば萩の上風
あやなくにききまがへとや萩の音は 雨ならぬゆよもぬれし枕
さよしくれまかへてもうき萩の音は た、秋風にきくへかりける
萩のはのよふかき露にしほれてや かせさへあらぬむらさめのこゑ

(御) 一九四三・六六五
実隆 二九八七
政為
済継 六四〇四

四月十二日 39 萩花移水 秋の4

おのづからをしとしもみじ萩の露 落ちても水の色にながれば
萩のはなうつろふままにながれ行く 水にはしかのしがらみやなき
花ちらは色なき浪をいか、みん 影もふるえの水のむら萩

(御) 一九四四・六七八
実隆 二九八八
政為

四月十三日 40 薄妨往友 秋の5

※公・古：反

しの薄相坂山も道たえて たが心にかみだれそふらん
みだれあひて尾花にさこそ余るとも わが袖よきよ野べの夕露
尾花さへ浪はかけ、り秋や猶 袖やすからぬまの、うら人
ゆきなれぬわか袖のみか花す、き 秋の、かせもわけまよふらし

(御) 一九四五・六九四
実隆 二九八九
政為
済継 六四〇六

四月十四日 41 草花色々 秋の6

秋のの花に咲きいづる風の色を なにの匂ひにさだめてかみん
あだなりと秋にや見えん花ごとに うつる心のいろのちくさを
分まよふ花野、露のすり衣 いづれかふかき色にみたる、
うすくこく何をかわかむ秋の、の 草はみなから花の色かを
いつれそとこ、ろの色もあさはかに うつる千種のはなの夕露

(御) 一九四六・七〇六
実隆 二九九〇
政為
済継 六四〇七
元長 六四〇八

四月十五日 42 槿一日栄 秋の7

あだなりとみる槿を空めにて 一日一日とおくるはなかな

もイこカ

みるがうちもたのむとはなく吹く風に よぞのさくらやけさの朝がほ
あすまての花とみるとも朝かほに 浅からめやおもふなこりは
ひとりしめたのみなきよをしりかほに あすともいはぬ朝かほのはな
あさかほのけさ見るはなや一夜妻 あすとたのためぬ露の契は

実隆 二九八一
政為
済継 六四〇九
季種 六四一〇

四月十六日 43 霧隔山寺 秋の8

照る月をみし世へだててさらしなや 峰なる寺も秋霧の空
吹きほる谷風ながら立つきりに かねさへ遠きをはつせの山
鐘とをくさ、なみ暮てそことしも なからの山の秋きりの空
へたてけりそのあかつきもこゑ遠き かねの御たけの夕霧の空

(御) 一九四八・七九五
実隆 二九九
政為
為廣 六四一一

四月十七日 44 田上稲妻 秋の9

いそのかみふるのわさ田の霧の上に ほに出でけりないなづまのかげ
秋寒も山田守る庵にいなづまの よるのふすまをしく光かな
ひきむすふ小田のかりほもいなづまの 影みるほとをたのむはかなさ
夕暮の雲より雲にうつりきて いなはをさらぬ稲妻の影

(御) 一九四九・七七四
実隆 二九九三
政為
済継 六四一二

四月十八日 45 旅店聞虫 秋の10

あけば又ふりすてがたき名残あれや 一夜のやどの鈴虫の声
行暮れてたのむ野原の草の戸に 我ぞあるじと松むしのなく
ひをへつ、うきか中にも虫のねを たよりにあかす野へのやとりよ
たかための草のむしろそ終夜 われを起ても松むしのなく

(御) 一九五〇・七三一
実隆 二九九四
政為
済継 六四一三

四月十九日 46 雲端初雁 秋の11

くるかりの翅にかかる白雲は こころなくても山やこえけん
暮れわたる雲にきこえてあま小舟 初かりがねを送るうら風
みねたかみわかる、雲になく鴈や こしかたおもふ明ほの、こゑ

(御) 一九五一・七三八
実隆 二九九五
政為

四月二十日 47 鞆中遠鹿 秋の12

草枕露けく成りぬをしかなく 峰の嵐とおもひやりても
しかのねもまだおくふかし草枕 あすの山ぢやはるかなるらん
露さむき野へのかりふし明やられて おのへをこゆる鹿の音もうし

(御) 一九五二・七六二
実隆 二九九六
政為

四月二十一日 48 月前幽情 秋の13

草の戸にみるらんかげを思ふのみ 玉のうてなの月のくまなる
なぐさむも思ひのそふも秋の月 うき身になにの契り有りけん
あかすおもふ千里の月も身の秋の 心は夢のやとり成ける
しらぬよのなにはかりなる契りをか 月はたつぬるよもきふのかけ

(御) 一九五三・九一二
実隆 二九九七
政為
済継 六四一四

四月二十二日 49 老後惜月 秋の14

老となる影をぞ思ふかたぶくを をしとのみみし月にのこりて
しばしはとたのむよはひもうき雲に かたぶく月や袖ぬらすらん
月もた、みるわれからの影や猶 老の涙の袖に深ぬる
影ふくるあはれはさそと老らくの よそにおもふも秋のよの月

(御) 一九五四・九三四
実隆 二九九八
政為
済継 六四一五

四月二十三日 50 水辺秋夕 秋の15

目の前に行きてはかへるわた瀬にも 舟出かなしき秋の夕波
身に残る夕もかなし山水の ゆくかたしらぬあきのおもひに
音むせふ山した水に霧はれて 岩木も露の夕をそみる
秋とおもふ心の色もさそはれて かへらぬ水の夕暮もかな

(御) 一九五五・七八四
実隆 二九九九
政為
済継 六四一六

四月二十四日 51 故郷野分 秋の16

あかしつる野分の跡の村雨に やがてしづくもたえぬやどかな

ふり残るひばらがはらも庭もせに 木のはとちりて野分吹くそら

名のみたつ野分の暮よ古郷は はやく秋かあれしまゝなる

住うかれ故郷の人の出しにも 野分せし日の秋にや有覧

あらしつるほとはかねてもみし宿の さらに野分の跡の露けさ

庭の面は此タくれをまたてに あれにし物を野分たつなり

秋のよのね覚にまたでから衣 うちおどろかす心みじかさ

山風のしのおりはへしののめの 露けくも有るか衣うつこゑ

鳥かねもき、もらしつ、うつ衣 うつる事なくよさむをや思

ひとりうつこゝろよいかにかさねても いまはさらなる衣／＼のそら

秋の菊花の光に星の名の 老いぬる人のうへにこそみめ

仙人のほしをかざしのためしにも くも井のさくのちよをちぎらん

露霜の山ちにみるもさく菊は 老せぬ花の秋やちきらん

四月二十六日 53 対菊延齡 秋の18

四月二十七日 54 紅葉勝花 秋の19

から錦木のはの色のおかみ草 さこそまだみぬ花はありとも

もみぢばは今はかぎりの匂ひゆゑ 花よりふかき名残をぞ思ふ

(御) 一九五六・
※九七〇より、第2三三りを

実隆 三〇〇〇

政為 六四四七

為孝 六四一八

済継 六四一九

(御) 一九五八・九八二

実隆 三〇〇二

政為 六四二二

為孝 六四二二

済継 六四二四

四月二十八日 55 鐘声送秋 秋の20

行く秋に舟も車もなにならで かねははるかにおくる声かな

いつも聞くをのへのかねもけふのみの 秋のこゑにやなして惜まん

行秋にをくれぬものゝうき数と 恨はつへき鐘のをとかは

かねの音もいまはの空の身にしめと 霜をきそめて秋やゆくらん

冬 四月二十九日 56 枕上時雨 冬の1

初時雨又みにしらぬさよ枕 秋と吹くかぜも夢にうつりて

空にはや過ぎしもわかずさよ時雨 まくらひとつにふる心ちして

さらに身は秋の思に立かへり 枕しくれてななき夜もうし

いくかへりおなししくれをかこちも 猶あけ残るさよまくらかな

五月一日 57 落葉窓深 冬の2

色こきは木のはも窓の光にて 思はぬえだの雪ぞつもれる

雨とふる木のはを窓にうらみても 月はよをへてはるるかげかな

さそひこし木のはにむかふ窓のうちは くもるもさむき山かせの暮

秋の色に今あらはれて木がらしの 梢も松の下葉にぞみる

やどるべき影やあらしの冬がれに 松だにのこるこずゑならずは

松にのみ波をのこして夕嵐 なへて冬木は音をたえぬる

あさな／＼まつのははかりあらはれて かたへさひしき木枯のこゑ

(御) 一九六〇
※二二〇・二六・七

実隆 三〇〇四

政為 六四二五

済継 六四二五

(御) 一九六二・〇五六

実隆 三〇〇五

政為 六四二六

済継 六四二六

(御) 一九六二・〇六四

実隆 三〇〇六

政為 六四二七

済継 六四二七

(御) 一九六二・〇七三

実隆 三〇〇七

政為 六四二七

済継 六四二七

五月三日 59 冬草纔残 ※古…谷 冬の4

かれてたつ柳も寒しわが門の 一むら薄かぜは見えねど
霜枯はなにをよすがのおもひ草 あるにもあらぬみぎはがくれに
はかなしや千種にわけし心にも 枯たつ陰をそれとやはみる
冬草の霜の末はもたちかへり はるの雪まの春日の、原

(御) 一九六四二〇九三
実隆 三〇〇八
政為
済継 六四二八

五月七日 63 水鳥知主 ※柏1124…連 冬の8

我が袖の外にやはみむ水鳥の 羽打ちかはす池のこころを
めにちかくみなれそなれていけ水に 独ある鶯の我にしたしき
池水になれぬる鳥の心として たちゐに我をしたひかほなる

(御) 一九六八二二五四
実隆 三〇一二
政為

五月四日 60 禁庭夕霜 冬の5

たがための衛士のたく火のかげもみん 夕霜ふせぐわざにはあらねど
鶺鴒のわたすにもあらぬ雲のうへの みはしも霜にくるるさむけき
秋かせの色かわすれぬ萩の戸に はらひもあへぬ霜の夕かけ
をきとめんよるのひかりよくもりなき 雲井の庭の月の夕霧

(御) 一九六五二〇七九
実隆 三〇〇九
政為
済継 六四二九

五月五日 61 氷閉細流 冬の6

くだくもむせぶもおなじ石間行く 音にかくれぬ夜の山水
くだくも結ぶもおなじ石間行く 音にかくれぬ夜の山みづ
こほりてはそれとかひなしかきね行 水のたよりのかれぬはかりも
むせぶかとかきやるちりの跡よりそ 氷り初ぬる水のひとすち
石間をもわりなくとめて行水の うすき氷になとむせふらん

(御) 一九六六二二二五
実隆 三〇一〇
政為
為孝 六四三〇
済継 六四三一

五月九日 65 連日鷹狩 冬の10

一とほり霰ちりくるさよ風を などが夢路にすぐさざりけん
夜をさむ思ひくだけてまどろめば 霰をまたぬゆめも有りけり
みる夢をさそふもよるの玉あられ はかなや、かて袖に入る

(御) 一九六九二二五〇
実隆 三〇一二
政為

五月十日 66 雪中遠望 冬の11

心ひく道はゆづるのたえじとや けふのかりばをあすも契らん
又暮れぬけふばかりとぞかりころも 昨日はとまる山ぢなりしを
かり衣見し色もなくしほれきぬ 昨日にまさる霜のさ、はら

(御) 一九七〇二二二
実隆 三〇一四
政為

五月六日 62 旅泊千鳥 冬の7

なみ枕今はなかでもとも千鳥 しばしうちぬる夢も見せん
波枕かはるいくよの友ちどり おなじこゑにもとふ夢ぢかな
こと、ふやおもふ都の河ちとり き、しに似たる浪の枕は

(御) 一九六七二二四八
実隆 三〇一一
政為

大ひえやさながらここに九重の かさねあげてもむかふ雪かな

(御) 一九七一
※二七三三…へて

波のうへのあはとはるかに見し鳥も 雪にまちかくうかびいでつつ
めちとをき木すゑはきかぬ雪おれも みるこ、ちするみねの松原
かさしかと興つ塩合にうかふ花や 散かふ雪の淡路しまやま

実隆 三〇一五
政為
為廣 六四三二

五月十一日 67 駅路凌雪 冬の12

分けきつる心もしのしのづかの むまやづたひぞ雪のおくなる

(御) 一九七二
※二一〇四…つる

分けまよ雪のふぶきの山ふかみ みづむまやなる宿だにもなし
しら雪のふりにしをの、かよひちや いまもむま屋の名をつなぐらん
風ふ、く雪にもさるやかさはらの 駅路遠く分るたひ人

実隆 三〇一六
政為 六四三三
為孝 六四三三

五月十二日 68 冬夜難曙 冬の13

闇ふかきふすまの下にへだててや 音せしかねも聞かで待つらん
よイ

(御) 一九七三…二八

さてもうき霜よの空に秋風の 霜よりなれし覚なれども
霜水かたしく床に明ぬよを 待人あらは猶やたのまむ
をそくとくかそへつくしていくたひか 霜よのとり八こあきくらん
明やらぬなかき霜もいたつらに あかしかねぬる身にやしるらん

実隆 三〇一七
政為 六四三四
済継 六四三五
為孝 六四三五

五月十三日 69 炬辺閑談 冬の14

※古く爐

思ふこといひもてゆけば埋火の あらはれぬしも下にのこらじ
うづみ火の光をはると花鳥の あらましごとをまづぞかたらふ
かたり出ん後をぞ思身のうへの なにかは残る埋火のもと
かたり出ることのはまでも埋火の 光なき身を思ふにそうき
いひよればともになにかは埋火の もとのこゝろをしるもしらぬも

(御) 一九七四…三三九
実隆 三〇一八
政為 六四三六
為孝 六四三六
済継 六四三七

五月十四日 70 老少送年 冬の15

つもりてはそれもかはらじ身に過ぎし 昨日の年の人に暮行く
老にのみくるしとぞ思ふたがうへも さかさまにゆく年はなけれど
老らくをいてふ人とて年波の これすはいと、身をやなげかん
ゆくとしをおもふやはる身の上に つもりつもらぬこゝろくは
たか身にもこゆるはおしき年なみを 中く老やおもはさるらん

(御) 一九七五…二四八
実隆 三〇一九
政為 六四三八
済継 六四三九
為孝 六四三九

恋

五月十五日 71 寄天忍恋 恋の1

いひ出でぬ心を空にてらしみば 中中世にはしられざらまし
しめゆふも跡やは見えん大ざらの こころのほかはたれにしられん
うかれてはあまつ空なる心なと 世にもれしとは思そめけむ
それとなくなかめそめしも久方の 天つ空のみあはれとやしる

(御) 一九七六…二六九
実隆 三〇二〇
政為 六四四〇
済継 六四四〇

五月十六日 72 寄風聞恋 恋の2

いひやらん我に誠のたよりあらば 音する風にきかせそめても
よそにのみきかばかひなしかがねを 吹きこす風よ人にはありとも
おもふかたのをいてもかなやえにしあらは 音きく波の枕かはさん

(御) 一九七七…三三五
実隆 三〇二二
政為 六四四〇

五月十七日 73 寄雲見恋 恋の3

なににこの身をうら島にたつ雲の みてはくやしき思ひそふらん

(御) 一九七八
※二二一八…七

風のまへにうきたつ雲の行ずりに よしやそれともあらぬ面かけ
心にもまことあらはとたのむかな 雲にまかへぬ花のよそめは
へたでなく見るにうつろふ浮雲の さためなきさへたか心なる
さらはなとおもひもきえぬ身の上に みればあたなるよそのうき雲

実隆 三〇二三
政為 六四四二
為孝 六四四二
済継 六四四二

五月十八日 74 寄山契恋 恋の4

思へ猶ときはの山にさく花の いはではたのむいろもみえじを
うごきなき山のなにおふいもとせを へだてぬ中のためしにもせん
ことの葉の末もいかにとき、わひぬ うき暮ことのみねの木からし
こえしともなみをはかけすともにみん 千世をそ頼む末のまつ山

(御) 一九七九…四三三
実隆 三〇二三
政為 六四四三
済継 六四四三

五月十九日 75 寄野占恋 恋の5

しらぬ野もわが心なるあしうらの あはぬ道にはふみもたがへじ
おなじののゆかりをとひてしるべある 心のうちにみをやまかせん
思ある心の道のとをき野は 夕けとふへきやとたにもなし
思ひねの夢野の露もたれにかは 心のうらとかたりあはせん
逢こともたのみなき身はまよひこし こゝろのうらやあたしの、露
あたに見し夢の、草のまくらにも 心のうらの逢夜をそまつ
思ふ道に逢へき足の占てかい むらさきのゆきしめの行とも
いとほめやたえぬおもひと野への水に 三角柏もたつ名なりせは

五月二十日 76 寄海遠恋 恋の6

もしほ草あまのすさみのうへさへぞ かきおきながらたよりだになき

しにかへり二のうみはめのまへの 恋にははるけき波路をぞ思ふ
としもへぬ枕のしたとおもふしも うきはならひを浪ちへたて、
尋みはおなしこゝろのしるしあれや 蓬か嶋もためしやはなき

五月二十一日 77 寄里待恋 恋の7

暮ごとを此里人にしられじと 心をとるも待つにくるしき
日ぐらしのこゑもをりはへうち侘びて 人待つさとのころをやる
待ふくるわか涙にはみるもうし いくさと人の袖の月影
きなれしもおもへはちかき里の名を いつとて人のはやたとらん
かりにたにとひこぬ人をふか草や 野となる里にいかゝたのまん

(御) 一九八〇三四六

実隆 三〇二四

政為

重治 六四四四

為孝 六四四五

済継 六四四六

為孝 六四四七

季種 六四四八

(御) 一九八一

※ 二二〇…それ

実隆 三〇二五

政為

済継 六四四九

(御) 一九八二三九七

実隆 三〇二六

政為

済継 六四五〇

重治 六四五一

廿二日 寄垣通恋 78 恋の8 欠1人…済継（公宴続歌）で補う

- 1 ◆思ひあまりしのひてこえし中かきハ 飛 満 志 古 可起 おやのいさめぬ道もわりなし 毛 利 奈
- 2 思ひあまり行てや見まし山かつの 飛 梨 満 可 かきほの花の色にこひつ、 起 本 乃 能 尔 徒
- 3 あきて猶……の道やあらん身を 秋……すハ 春
- 4 へててなきこ、……ハ思ふ事いひいて、こえ 関のあらかき 奈 支 古 亭 古 可起 盤 多
- 5 櫛はのかけをしるへにとめてこし 者 可 尔 古 神のゐかきは人もへたてし 可起 盤 多
- 6 ◆もるとてもかよふ心は川くちの 毛 可 盤 世 起 せきのあらかきへたてハてめや 可 多
- 7 ……
- 8 その……へたてなく いひよるつてや宿の夕かほ 楚 多 奈 可本
- 9 起ゆけは我引とめよた、ん名の うはらくれの庭の神かき 希 者 可 可起
- 10 心たによハ、さすかあしかきの 多 尔 佐 可 可 ひまもとめてもいひ……さん 万 毛 毛
- ・あれで猶しのふたよりの道やあらん 身を秋風のかきはならずは
- ・おもはすのそのあしかきのかいまや へたてぬ中のはしめなるらん

元 六四五二
実隆 三〇二七
政為 ※書・古・伊・れ
永宣 ※書・伊・かと
※2書・伊・ん
（御） 九八三・三七七
※相・ず
為孝
俊量
季種
為廣
重治
政為
済継 六四五三

廿三日 寄草馴恋 79 恋の9

- 1 うらなくハ思ひそめても初草の 人のむすハん末もこそあれ 奈 乃 古
- 2 ◆うつろハん色をもしらすさく花の 毛 志 佐 尾はなにましろ秋やたのまん 者 那 尔 満 多
- 3 ◆なれてうき人の心の花す、き 奈 起 乃 支 本 尔 ほにいてそめし秋そくやしき 起
- 4 ◆苔むしろ草をかきねのやとりにも 可 株 屋 李 毛 よをしへたてぬ契をそ思ふ 多
- 5 朝夕にミなる、……ちりて 尔 里 飛 起 ひとりねつらき床夏のはな 者 那
- 6 今ハさはよもきにましろあさはかに 盤 毛 尔 満 者 可 尔 心ともなき心をも見む 奈 支 毛
- 7 すきかてに宿とひなれし夕かほの 起 可 尔 奈 可本 ……かひなし 可 飛 奈
- 8 ……草のいつまでか……
- 9 あかすミる朝（夕露の）をミなへし 可 奈 おちてもあた（の名をやかけ南）済継 多 六四五五
- 10 手にふれてつむとハすれと忘草 尔 徒 おふとし聞はうきならひかな 者 起 奈 可 那
- 11 朝夕になるや人のおもひ草 尔 奈 留 飛 をきそふ露も袖にあまりて 起 尔

実隆 三〇二八
政
永 六四五四
元
俊
（御） 九八五・四二九
重治
為廣
季種
為孝
済継 六四五三
※公・ら

廿四日 寄木厭恋 80 恋の10

- 1 ◆い^飛とふにはおもひ入^古へきこゝろかハ たえぬ^奈なけきの^能は山^志しけ山 政
- 2 さのミ^奈なといとひなはこそやとり木の あらぬ^奈ねさしもなき^毛習^奈かハ 永
- 3 せめてさハいとふる中^尔を花^可にかせ たゝ^古ころのこゝろも^毛かな 元
- 4 ◆つら^徒きにもこりははてなて 椎柴^志のしゐてしたふや猶いとふらん 俊
- 5 よそへてもうきよの中^起はいとはなん たえてさくらのわれやなになる^奈 (御) 一九八五・四八九
- 6 ◆おもへかし思^可ふかたにそあ^多たなれと なを^奈やとり木の^梨名^可をもかけゝる^類 濟 六四五六
- 7 我^可からとたくやしほ^志木^本は浦風^毛も なきたる^奈あさのおもひとを^多ミよ 重
- 8 玉^可かつら神^徒のつくてふ木^毛にもあれや かけてわ^可か身^奈のならぬ恋^可する 実 三〇二九
- 9 ◆いた^以つらに色^多にいてぬるに^尔しきゝの たか^多心^可よりくちハは^李つらむ^無 為孝
- 10 いか^可、せんいと^者はすともさく^佐花^能の色 香^多うつさぬ^奈朽木^奈なるミ^盤は 季種
- 11 せめてさハ^志しらせて^可しかなよそ^奈になす^類 身^本をうつほ木^奈のあな恋^毛しとも 為廣

廿五日 寄鳥偽恋 81 恋の11

- 1 いつハりのある世^盤はつらき^者は^奈るかハす 鳥^尔をためしに契^者と思へは 永 ※書・伊・そ。 ※2ねか本ノマ、書…る。ね。伊…を
- 2 あくる夜^尔に鳥^奈をそらねといひ^奈なして しハしも袖^毛をひかへ^飛つる^可かな 元
- 3 とも^毛すれはね^者をのミそなく^奈とりの跡^乃のこと^古のはま^者てもまこと^毛なき^奈よに^尔 俊
- 4 春^尔の野にたのめ置^毛つる跡^奈もなし 尾花^尔に鳴^支し鴝^支の草^支くき (御) 一九八六・四〇九 ※柏：おきても
- 5 ◆いつまてか絶^可しといひ^飛しこと^古のはの か^可よひし鳥^飛のあ^可とかたも^多なき^奈 濟 六四五七
- 6 ◆偽^尔に明行^里そらはとり^奈ならて 人^乃のこゝろや人^可は^類かるらむ^舞 為廣
- 7 今^古こむと待ちこしもの^毛を鳥^多たにも 人^毛のいつはり^徒つくる^累よは^者かな 季
- 8 ◆山^可ふかみはく^可とふく^見風^毛もいつはりの たか^可ならはしと思^奈ふさへうし^者 政 ※古：秋
- 9 ◆かけていへ^可はまこと^者にもあらぬ^古面影^尔の それさへ^徒つらき^支かり^可の玉章^梨 為孝
- 10 空^尔にあらは鳥^者にといふも^尔此世^尔にて 見えぬ^可まこと^可ハいかゝ^堂のまん 実隆 三〇三〇
- 11 たのめてもこぬ^古夜^古あけゆくいつはりの^者 つらさ^徒まされぬ^満鳥^可のこゑ^可かな 重治

廿六日 寄獸顯恋 82 恋の12

- 1 今ハはや秋風たちぬさをしかの 者 ねにあらはれて恋やわたらん 者
- 2 ◆佐飛多 さんとひたる犬のこゑよりかよひちを 古衛 人のとかむる中となりぬる 李可
- 3 ◆我そなとよそにたつ名を棹鹿の 奈 ねにあらはるゝ恋もこそあれ 与所尔
- 4 しはしたにかけとたのみしうつは木の 志者 物のくまなき世をいかにせん 尔可希
- 5 あたにちることはもあやし家の犬の 多尔 つたふるふもあればあるよに 留古
- 6 かくつらき心のあきになくねより 可徒起 野ハらの鹿もあらはれぬらん 尔
- 7 いひもらす世の口のはにかゝらすハ 毛 うへし虎にも身やハおしまぬ 乃者尔可
- 8 ◆とても世にしらるゝ道 尔志流 をいかにして 可尔 もとこし駒のゆくにまかせん 毛
- 9 ◆いかにせんおそのたはれの心より 可尔 よのくちのはにかゝるうき名を 乃者尔可
- 10 とてもさハもらしはてゝよあちきなく 毛 ふすゐの床の身をやすくさん 奈
- 11 よるの犬こゑをしらへに関守の 累 更にとかむるかよひちもうし 衛志
- 俊 元長 永 重治
- （御）一九九〇・四五九
※柏一四五九も、に、か
実隆 三〇三一
※雪：が
季 為廣 六四五八
濟 六四五九
※公：と
為孝 政為

廿七日 寄虫切恋 83 恋の13 後柏原天皇自筆の写本あり①

- 1 みし夢も胡蝶の夢と何かいはん 毛 わかおもひねのわか身なりける 可者
- 2 ねにたにもたてぬうらミハ消かへり 奈多尔 身を蛸虫の霜かれのころ 尔多尔
- 3 ◆きりくすなミたやさそふいとせめて 奈 ひとりねつらき秋の枕に 悲
- 4 しられしな夜の螢のすかたより 志 見えぬ思ひにこかれわふとも 奈支
- 5 なきあかす虫もこそあれうき恋に 可 よの間あやうき露の哀よ 毛古
- 6 ◆なくさめて鳴よる虫のこゑのうちも 奈 わか身たへしと思ふよとこを 尔多
- 7 ◆しらせはや身はひをむしの夕をも 志 またしとおもふ心よハさを 尔
- 8 思あれば小田のかはつも水の底に 者 鳴をわか身のうへに聞かな 可者
- 9 われも又身にしむ千々の思ひとを 尔 守宮のしるしいもしるらめや 日
- 10 ◆身ひとつをなきつくすとも秋の虫の 飛 させるあはれは誰かかくへき 奈支徒
- 11 ◆さえぬ間をそれとはかりやかけるふの 可遣 もゆるおもひに身をつくすらん 毛
- 俊 永 政 季 為 重 実隆 三〇三一
- （御）一九八七・五二九
※柏一九八七：草も
為 重 永 政 季 為 重 実隆 三〇三一
※日・書・伊・公：も

廿八日 寄筆切恋 84 恋の14 後柏原天皇自筆の写本あり② ※柏：筆と誤記

- 1 なをさりに人をそおもふことのねに 奈越佐里尔 古 年尔 あま飛^万は行方もなし ※目：は
- 2 ◆わかれてハ絶^奈んとする中の緒^乃の なけきくハ、る音をもこととはれ 可多 累 可飛奈 徒万 流 毛古者 濟^{六四六一} ※公：御製の五七部分を誤写
- 3 かたミとてみるもかひなしつまことの 引わかれてのいまのこゝろは 元
- 4 いかならんわかれかなしきことのねハ 可奈 可那 支古能 実^{三〇三三}
- 5 ◆なけきある音をやと、めん玉^古ことの あらぬしらへに引わかれぬる 永宣
- 6 ◆そのこと、思ひもいてよすちに 楚乃古 日毛 春尔 為廣^{六四六二} ※公：ち
- 7 おもはすよならずことはのやかてはや 毛者 与奈 須古 可者 俊
- 8 ◆いかなんたのも更^毛にうきことの 緒^{堂徒}をたつづるの別なりせは 可奈 毛尔 支古 奈者 為孝 ※目：書・伊…を聲に
- 9 ◆うきことのしらへハおなしわかれちよ 古 志 奈 政為
- 10 ◆みむもうしきぬくいそくつまことの 毛 徒万古 古寸 尔 季種
- 11 ひきとめぬ人はつれなき別路に 盤 連奈起 尔 重

廿九日 寄絲恨恋 85 恋の15 後柏原天皇自筆の写本あり③

- 1 いかさまにうつりかハらんしらいとの 可 満尔 徒梨可 志 もとみし色のいふかひもなし （御）一九八九一五六七
- 2 ◆かたいとの思ひたえてハさ、かにの 可多 飛 佐 ころもにかゝる夕たになし 古 毛尔 多耳那 濟^{六四六三} ※目：柏…は
- 3 我もさそくわこのいとのをのれゆへ 毛 王 乃能連 実隆^{三〇三四}
- 4 ◆うきふしをうらみわひつゝ、かたいとの 婦 飛徒 可多 思ひたえんもさすかなしき 元 ※目：重治
- 5 おもひあまりかつうらむるもしらいとの 毛飛 万 可 志 この一ふしにいひやなすへき 重 ※目：元長
- 6 ◆手にふれたかとなるならししけいと 尔布 堂可 留奈 志 季
- 7 みたれても心のすちに引いと 多 乃 尔 たえぬうらみをくり返しつゝ、 永
- 8 かけすてしこゝろのいとのみたれこそ 可遣 古 見多 古 つゐに恨のふしとなりけれ 徒 尔 奈利个 為廣^{六四六四}
- 9 しらすわらいひもとかれぬふしとの 志 飛毛 可禮 婦 なかきうらみに身をやつくさん 奈可起 尔 政
- 10 うらむるもなにのふしそとしらいとの 留毛奈尔 志 思ひよりても人のとへかし 飛 李 可 俊^{六四六五}
- 11 くりかへしおもふもうしやしらいとの 李可 毛 志 以登乃 何にそめける心なるらん 尔 遣留 奈 為孝

冊日 潤戸雲鎖 86 雑の1 欠1人：元長 後柏原天皇自筆の写本あり④

- 1 ◆よそ^{与所}よりもあくる^李光^阿のをそ^乃かれや^類 た^多にの戸^多さし^尔を雲^満にま^可かせて 俊
- 2 谷^盤の戸^能は雲^奈のミ^可とち^能てな^奈かそ^能らの 光^奈すく^起なき^乃谷^多のした^多庵 重 自：柴
- 3 た^堂にの戸^乃のな^能かは^奈は雲^可を^者ある^阿し^累にて と^尔ちは^多つる^満を^可もま^可か^世せて^可そ^可見る 実 三〇三五
- 4 玉^可かつ^可らた^可えぬ^可物^可そ^可と^可る^可雲^可に さ^佐も^毛谷^希せ^者は^可き^可す^可ま^可ぬ^可を^可そ^可おも^可ふ
- 5 ◆夜^毛の雨^毛の夕^毛残^毛も^毛ふ^可か^可き^可谷^盤の戸^阿は あ^阿け^希た^多つ^多雲^尔の色^尔た^多にも^多なし
- 6 ◆たち^毛出^可し雲^可も^可わ^可かれ^可す^可帰^可来^可て 谷^本のと^越ほ^本そ^本を^本お^本ほ^本白^本雲 濟
- 7 ◆う^毛ら波^毛もし^毛らむ^毛よ^毛川^毛の谷^耳の戸^多に 八^多重^多た^多つ^多雲^多ぞ^多明^多ん^多そ^多ら^多なき^奈 為廣 六四六六
- 8 ◆ほと^本とも^奈なく^奈谷^可の戸^可く^可ら^可しい^可か^可は^可かり^可 み^年ね^古こ^類す^能雲^能の行^可ゑ^可と^可か^可見^可ん 政
- 9 谷^布ふ^可か^可み^可あ^可くる^可ひ^可かり^可は^可見^可え^可ね^可とも^可 さ^類す^可か^可に^可夜^可の雲^毛とし^毛も^奈なし 永
- 10 ◆水^可かさ^可そ^可ふ^可川^可音^可た^可かし^可谷^阿の戸^阿は あ^阿め^盤さ^盤へ^盤は^盤れ^盤ぬ^盤雲^盤や^盤と^盤つ^盤らん 季

自筆では、1 俊量と2 重治の間に元長の詠歌がある。

・た^多にの戸^能ハあ^流くる^奈色^佐なく^古さ^古こ^古めて 夜^万のま^乃の雲^能のは^連れ^可ぬ^可空^奈かな 元長

六月一日 村々煙細 87 雑の2 後柏原天皇自筆の写本あり⑤

- 1 ◆里^志々のし^奈る^留へ^万とや^可なる^可や^可ま^可か^可つ^可の か^可へ^可る^可夕^可に^可ほ^可そ^可き^可け^可ふ^可り^可も 俊
- 2 ◆たち^徒つ^盤く^盤煙^盤は^盤き^盤え^盤て^盤遠^盤近^盤の 里^本わ^尔く^尔ほ^尔と^可に^可の^可こ^可る^可色^奈かな 元
- 3 を^地ち^地この^毛ふ^毛も^佐との^尔さ^尔と^多に^多山^多柴^多の け^希ふ^奈りを^奈な^可と^可か^可た^可て^可ハ^可そ^可ふ^可らん 重
- 4 谷^尔に^可そ^可ひ^可山^可に^可か^可た^可か^可け^可す^可む^可里^盤は 真^个柴^可の^可け^可ふ^可り^可末^可も^可つ^可か^可す 実隆 三〇三六
- 5 山^可か^可け^可や^可ひ^可と^可り^可く^可に^可す^可む^可里^可ハ け^氣ふ^梨りの^毛末^毛も^毛わ^毛か^毛れ^毛て^毛そ^毛ゆ^毛く 季
- 6 ◆た^堂え^尔く^阿に^阿あ^阿さ^阿ゆ^阿ふ^阿見^阿え^阿て^阿い^阿く^阿さ^阿と^阿か^阿 た^以つ^具る^佐煙^登の^可末^可も^可つ^可か^可す 季
- 7 た^奈え^尔く^尔に^尔な^尔ひ^尔く^尔け^尔ふ^尔り^尔の^尔よ^尔そ^尔め^尔より^尔 里^奈は^多な^多れた^多る^多家^多ぬ^多を^多そ^多し^多る^志 為孝
- 8 遙^尔に^尔も^尔た^尔へ^尔ぬ^尔煙^尔の^尔す^尔え^尔く^尔に^尔 す^可む^可里^可見^可え^可て^可くる^可山^毛も^毛と 濟 六四六七
- 9 た^毛て^毛そ^毛ふ^毛も^毛う^毛す^毛き^毛煙^毛や^毛こ^毛と^毛ら^毛ぬ 賤^可か^可思^可ひ^可の^可す^可え^可の^可里^可々 為廣
- 10 立^本の^可ほ^可る^可け^可し^可き^可は^可かり^可は^可た^可え^可く^可の 煙^可く^可ら^可へ^可か^可を^可ち^可こ^可ち^可の^可里^可 政為
- 11 ◆暮^遊ゆ^希け^者は^越と^支を^可き^可か^可た^可より^可立^可消^可て 一^个む^可ら^可け^可ふ^可る^可の^可へ^可の^可さ^可び^可し^可さ 永

二日 寺近聞鐘 88 雑の3 後柏原天皇自筆の写本あり⑥

- 1 ◆幾度かおとろきはてぬけふもくれ 可 者 氣 あすかの寺のちかき入逢 乃 可 俊
- 2 ◆鐘のをとそまくらにちかき橘の 満 起 寺はむかしのとをきんなこりに 能 奈 起 元
- 3 思ふ 爾 盤 には身のタくれも遠からぬ 毛 可 野寺のかねにつゆそこほる、 本 実隆 三〇三七
※書・高…ひ。
自・伊・雪…ふ
- 4 ◆小はつせのかねのこゑのミすか原や 者 世 能 可 祢 衛 乃 可 可 ふしみの里の夢のあけかた 婦 乃 希 可 為廣
- 5 おもふにもか 爾 毛 可 へらの色にかねのこゑ 爾 可 年 衛 みるやさひしききくやかなしき 佐 飛 支 可 奈 起 濟
- 6 ◆初瀬山ふもとの夢も覚にけり 毛 爾 个 里 河風すめるかねのひ、きに 免 可 年 能 飛 支 爾 政
- 7 ◆思へ猶身をハへたてぬえにしありと 遍 多 枕のかねにさむるねふりを 可 祢 爾 越 永
- 8 木かくれハ猶おくふかく見えなから 可 可 可 奈 可 かねのひ、きそ寺ちかくなる 可 祢 飛 可 奈 季
- 9 ◆ちかく聞かねも有けり行月を 可 可 年 毛 个 とよらの西にとをくしたへは 耳 越 志 多 者 為孝
- 10 きけは又あらしのすゑになりけり 遣 者 衛 尔 奈 尔 个 なれし枕のかねのひ、きも 奈 可 年 乃 飛 毛 重
- 11 ◆ならのはの名におふ寺の鐘の音や 奈 者 能 尔 乃 古郷人のゆめさそふらむ 佐

三日 暮林鳥宿 89 雑の4 後柏原天皇自筆の写本あり⑦

- 1 たちまよふ雲のはやしの村からす 満 可 者 能 可 ねもさたまらぬ夕あらしかな 祢 毛 佐 多 可 奈 元
- 2 しけき木に鳥ハかりねの一枝も 志 希 起 尔 可 祢 毛 なをやすかぬ夕あらしかな 奈 越 可 可 奈 実 三〇三八
- 3 いかにしる鳥の心そ世にとをき 可 尔 志 類 乃 尔 越 山はやしにといそく夕は 者 尔 以 盤 (御) 一九九四・七〇二
- 4 空飛はす、め色なる夕雲の 盤 奈 累 はやしやとりからすなくこゑ 者 屋 李 可 奈 為廣
- 5 ひとり猶ゆくもありけり夕からす 悲 梨 毛 阿 李 个 梨 可 数 おなし林のかけをへたて、 乃 可 希 越 多 濟
- 6 暮ふかき色や見えけん村鳥の 可 可 可 个 をくれしとゆく木々のやとりハ 暮 可 可 可 可 可 梨 政
- 7 鳥のなくかた山はやしかけ暮て 乃 奈 可 多 者 可 希 梢にうすき夕月夜かな 耳 起 可 那 永
- 8 なかめやるかた山はやしくれあへぬ 奈 可 留 可 多 者 色にねくらのさきそむれゐる 尔 祢 起 留 季
- 9 さひしさの何にまきれん夕間暮 飛 尔 満 支 はやしかくれにとりかへるこゑ 者 可 可 尔 里 可 遍 古 衛 俊
- 10 静なる雲のはやしも夕くれは 奈 留 者 毛 者 ねにゆく鳥やこゑさハくらん 祢 尔 衛 重
- 11 踏まよふ木の下やミに風たちて 満 尔 多 ねくらの鳥はわく色もなし 盤 具 為孝
- ※2書…お。伊…え

六日 夕陽映嶋 92 雑の7 後柏原天皇自筆の写本あり⑩ 欠2人：俊量・季種

○最後の二首は自より補う。

- 1 さか^{佐可}ミ^可かた夕日のすゑに百つ嶋の^{衛尔徒} けちめ^个見えたる浪のさやけさ^{多累个} 為廣
- 2 浪に^{尔幾}きえ雪にしつミしおも^{毛可希}かけも 夕日に^{尔可}うかふうらの^者はつ鴛 済 六四七〇
- 3 け^个ふりたつ室の八^乃寫の夕日^{乃可希}かけ うつろふ色も^可たかおも^{毛飛奈留}ひなる 政
- 4 春秋と思^飛ひわくへき色^{毛奈}もなし 入日^尔にこのる松^類かうらし^満ま 永
- 5 夕附日さすやいつく^とわきて^{みん} ふしのミ雪^{尔起}にうきしま^万の姿 実 三〇四一
※目・書……とか
- 6 くれな^{奈尔}ぬに入日色^類とるうき雲^満を 繪^{奈尔}しまのなミ^尔にうつしてそ^ミる 元
※目・書……とか
- 7 夕つ^徒く日のこらぬ色やあへのしま^満の 鵜^乃のすむい^以しのうへに^尔ミゆらん (御) 一九九七—一九九〇
※皆……なし
- 8 入日^{須尔}さすあとのゑ嶋^尔を夕浪^尔に うつして^累みるもあか^可ぬかけ^可かな 重
- 9 浪のうへ^尔にうつるはくも^盤るかけ^{累可希奈可}なから 夕日^尔にはる、浦^{志万}のとをしま 為孝
- ◎う^徒つしても見^{亭毛}ハや絵嶋^能の浪のうへ^尔に ゆふ日^可かけろふ空^{能个}のけしき^越を 俊量
- ◎波^万まなるはなれこしまや塩^{耳可多}にかた う^字つる入日^{累毛}もかけ^{希佐多可}さたか^{丹天}にて 季種

七日 長河似帯 93 雑の8

- 1 ◆たつ^{堂多}た姫雲のころもをおり^{可希}かけて むす^累帯のめくる河水 永 ※書……ハぬ歌
- 2 ◆せ^{世越}をあさミ岩に^{尔可}わかる、川水^{者奈多}ハ は^可なたの帯^可中絶^累てミゆ 季 六四七一
- 3 ◆谷川^{起奈可}のほそきな^春かれの一すちや 此山^飛姫のお^奈ひをなすらん 俊
- 4 帯^{尔世流古}にせるこの山川^盤はいく^能さととの 田面^{尔飛支}の水に^類ひきとら^{らん}らん 実 三〇四一
- 5 さと……^佐たま川^{堂満}のめく……お^ひ 元長
- 6 ◆行^めくる (ふもとの) 河^{尔奈可}は下の帯^毛の名^可にな^毛かれてもいく世^累へぬらん 政為 ※書……細谷歌
- 7 山とを^越く帯^{飛支}ひきすて、ゆく鴈^徒の 同^徒しつらなる末^累の河水 (御) 一九九八—一九九九
- 8 下の帯^毛の……いつるもちき^梨りある お^可なしな^可かれをた^累れ結^可ふらん 為孝
- 9 石川^梨やミとりのミ^{衛越}つのすゑとを^奈ミ は^累なたの帯^累そ^累たえん^累ともなき 為廣 六四七二
※公……は
- 10 それと^可見て^可むすハぬ水^毛の一すちも た^可か下帯^{奈累}の□め^累しなるらん 済
- 11 お^飛ひ……小川^累の行^累めくり雲……中山 重

八日 旅人渡橋 94 雑の9

- 1 ◆旅人やあやうきはし者能起奈可のうきながら 世わたる多累のミチにおもひくらへん 俊
- 2 水かふと駒可飛支多須万毛乃ひきくたすやまもの ちよりわたる橋のすゝ可李多し毛 実隆 三〇四三
※書：き
- 3 ◆うきことは古能のやまのミちを思ふにも 又たくひなき木曾のかけはし多飛奈支可者 元
- 4 ◆くれにけりたのむかけともやすらはん 月たにいかにさのふなはし多尔可尔奈者 永
- 5 たのむとも多毛（猶）こゝろ古せ多よ行くれ（て）（わたせもしらぬ水）のうきはし 政為 ※書：を
- 6 ひく飛……たひ人やはま名の…… 駒と、むらん 重治
- 7 ◆たひ衣きそのかけ可希ハしいかならん 世のあやうさを渡りなれすハ 李 ※書：衣敷
- 8 大江山すき起しいくの、なくさめに 日をわたるへきあまの橋立越多流遍阿万奈 （御）一九九九二八〇〇
- 9 ◆たれかさてうき世のたひの道な可起多飛奈らて わたる心のと、ろきのはし多須支者 為廣
- 10 ◆今毛楚その旅をしそ思ふハはしや ふりにしあとのむかし可多尔かたりに 為孝
- 11 こゝに……行けん旅人の今朝……のたなはし古个奈者 済継

九日 披書逢昔 95 雑の10

- 1 ◆しるし志累をく文をしミれはくりかへし むかしを今になすハかりなる 俊
- 2 ◆しるし志類を具筆に何かハますか、み 手にとりてミぬいにしへもなし可尔奈 実隆 三〇四四
※書：お
- 3 ◆みる文にむかし可尔のあとハのこれとも こ……の道は行方もなし多奈 永 ※書：とは敷
- 4 ◆ふかくみて猶布可ふるきよのおもかけは 心とうかふミつく起毛可希能きのあと 政 ※書：さ
- 5 まよふ……とめてのこし満をくをし……文の道かな可奈 重 ※書：お
- 6 ミる……昔にかよふ心あてやかし……文の道にあるらん累 季
- 7 忍ふらんむかし可の文よ何事の ありきあらず阿李須毛めのまへにして （御）二〇〇二八三九
※柏：み
- 8 ◆天地のひ飛らけし个古ことを今しるも かしこかりける筆のあとかな越毛阿可奈 元
- 9 ◆身は何の名にかのこらん代々をへて たえぬハそれと水茎のあと可飞楚阿 為孝
- 10 をして……結飛ひし繩のくり返し……むかふ文かな可那 為廣
- 11 しる……きし世ハよのつねのことハりに ち……ともおもハさるなむ志毛奈 済

十日 往事渺茫 96 雑の11

- 1 こしかたは行^古もしらぬ雲水に^{可多難} かへるやなにのこゝろなるらん^奈
- 2 ◆過行ハさたかならぬをはる秋の^{佐多可奈} 名残は年のつもるに^鯨そしる^{徒毛累}
- 3 ◆いつの間に過しもしらぬふることを^尔 おもひいづれば又はてもなし^飛
- 4 (恋しともなに) 心のあと、めむ^阿 過こ(しかた) ハ思ひわかれす^飛
- 5 老か身……や遠さかるいにしへハ^可 おもひ……さたかならめや^{多可奈}
- 6 身に過し月日はいはず春秋と^鯨 年ハいくたひ……きぬらむ^{多飛}
- 7 こしかたもかくやみてましと、まらぬ^古 ひかりもかけも久方の空^{可梨}
- 8 ◆いかにしていかに過こし年月も^{可尔} 思ひいつへき一ふしそなき^{福支}
- 9 ……いつち去る^流うかふ身ハむな……雲のはてしなるらん^{能者}
- 10 ゆく……心もそれとしらなミのはるけ……にや猶かへるらん^遊
- 11 身にはやくみてこしかたを尋ても^{尔者} よハ雲風の面影のそら^古
- 実 三〇四五
※雪…へ
- 永
- 政
- 重
- 季
- 元 (御) 二〇二八五二
※二〇二八五二の
一八五二の
- 為廣 ※書…は
- 為孝
- 済継

十一日 憂喜同夢 97 雑の12

- 1 なけきあれは色にいつるもうれしさを^奈 袖につゝむもたゝ夢にして^{尔徒}
- 2 何をうれへなにをうれしと思ひねの^奈 夢はかりなるかりの比よに^{飛年乃}
- 3 夢(ならぬこ)とやあるよの中の人の^能 (さかへ)もおとろふる身も^乃
- 4 めてし(花ちりし) なけきのそのかけも^奈 ともにのこらぬ春のよの夢^{可希毛}
- 5 いてやそのありのすきミにミし夢も^尔 はてハなけきのかけのかりふし^毛
- 6 ◆おもハしなうれしき事もうき事も^毛 夢のうちなる我としり^奈なは^志
- 7 たのしむも中くなく夢のよを……ある身とやたのまん^毛
- 8 つねな……たくへんやまさくらさき……春のよの夢^{徒年奈}
- 9 ◆よなくの夢のた、ちにかけてけり^奈 うきしつむよの波のうきハし^能
- 10 うきもその夢とて更になけかすは^毛 何をかのこる思ひ出にせむ^{尔奈}
- 11 ミれはよに咲てとくちる花の色に^尔 いくたひおなし夢かさめけん^飞
- 政
- 実隆 三〇四六
- 重 六四七三
※書…を
- 季 六四七四
- 永
- 元
- 為廣 六四七五
※書…ハ 夢ヲ公ニ云々ナシ
- 為孝
- 済継 六四七六

十二日 逐日述懐 98 雑の13

- 1 くれかたき夏のいく日もあたらのよの 窓のほたるのかけもしらすて
(御) 二〇〇三・八二〇
- 2 ◆しの(ふへき) 昨日はなくてけふも猶 あるをうらミの老のくるしき 政
- 3 ◆このはもかすそふ日々にあらはれて 身のおろかさ思ふかひなき 季 六四七七
※公を
- 4 ◆いたづらにさても過ぬとよるは思ひ ひるはくるてもまなにとハなし 俊
- 5 いそきつる身のいにしへもある物を ……老にかなしき 永
- 6 身……きのふのこのをこたりハけに……さそおもひしらる、 元
※書：お。※2書：ふ
- 7 天の戸のあくる日ことに何事を なすとハなしの身のミふりつ、 実隆 三〇四七
- 8 ◆かひなしやおろかなる身の心をハ 日々にいくたひかへりミるとも 重
- 9 ◆はかなくも昨日□けふとたのミをく 身のあらましもいつまでの空 為孝
- 10 (おくとこひ) ねとおもふまに(身の)老の 坂の(みこえつ) あらましのやま 為廣 六四七八
- 11 ◆を(ろかなる) いく年月かつもるらん あすもあらはと思ふたのミに 済 六四七九

十三日 胸消是非 99 雑の14

- 1 心とや心の月ハ月ならん くもりあるよもくもりなきよも 為廣 六四八〇
- 2 一すちにおもひわくへきことほりも ……心のまこと、やせむ 為孝
- 3 (ことにいて、いは) ぬもしおなしことハりよ (身のよしあしを) わくる心は 政為
※古：「し」はなし
- 4 ことはりはひとつ心のねさしかな この手かしはのともかくにも (御) 二〇〇四・八五五
- 5 ……なにはのことわざも……よしあしそかし 季種
- 6 ……いひしかむねのうちに……へたてける程 俊量 二書：ハ
- 7 ……かハれとも……雲霧もなし 永宣
- 8 ◆うき事ハこのよの中のならひそと おもひのとめてすくしつるかな 元長
- 9 ◆よしあしとわかこゝろをハわれならて たれかハよそにことほりもせむ 重治 六四八一
- 10 はる、をもくもるをいはいはし雲霧の へたてぬ胸の月にまかせて 実隆 三〇四八
※書：伊：案。雪：胸
- 11 ……しらぬよしあしも……思ひとかすや 済 雑

十四日 社頭祝世 100 雑の15

1 上下と人にみたれぬ道までも 尔多毛 わか世にまもれかものみつかき 可尔満毛見可

(御) 二〇五・九〇三

2 宮柱いくたひたてん君か代ハ 多可 うこかぬ天の下津いは根に 可耳

実隆 三〇四九

3 (よはひをもちきら) さらめや君か代ハ (いま住よしの松の) 千とせに 可耳

政為

4 神幾代しめの内外の宮ハしら 志毛 もとたつ道を君かこゝろと 可登

為廣 六四八二

5 をつからくもりなきよハ天照す 可梨奈支 神もやすくや君まもるらし 満毛

俊

6 おさめしめるめくみやおもふ世はなめて 於志盤奈 君千年ませと祈る神かき 可起

季 ※書：らむ。伊：寛
※書：へ

7 祈るそよ九かさねのうちとをも 年越 てすまもれ伊勢の神かき 満毛可支

元 ※書：へた敷

8 万代をいのる心はいはしみつ 盤者 きよきなかれにまかせてを見む 奈可尔満可

重治

9 住よしの松をしるへに祈てふ 志尔 のことふきハことのはのみち 者乃

永宣 ※書：世々

10 住よしの神そまらん敷嶋の 能毛 ミちもつきせず御代もかハらす 世須毛可須

済継

11 ミつかきの久しき御代のことふきも 可古毛 ……神ぞしるらん 志

為孝

室町・戦国期莊園制を支えた割符

―新見莊や北陸など中間地域莊園の事例―

辰 田 芳 雄

はじめに

一 割符の性格と替銭

二 備中国新見莊の惣請と年貢京進

三 新見莊からの「上り荷」の運搬路

四 北陸など中間地域莊園の割符

(1) 近衛家領越前国宇坂莊・加賀国安江保（「雜事要録」・「雜々記」）

(2) 北野社領加賀国富墓莊（「北野社家引付」）

(3) 上賀茂神社領能登国土田莊（「賀茂別雷神社文書」）

(4) 東大寺領周防国衙領（「東大寺文書」）

(5) 三条西家領越後青亭座（「実隆公記」）

(6) 東寺領遠江国原田莊・東大寺領遠江国蒲御厨（「東寺百合文書」・「東大寺文書」）

おわりに

概 要

割符という語には、「紙片の割符」と「上り荷」の両方の意味がある。新見莊では「紙片の割符」は京上夫が京進し、年貢銭で購入された特産品である「上り荷」は割符屋（問丸・借上などの商人）が運漕した。この年貢京進システムが室町・戦国期莊園制を支えていた。

新見莊の高瀬・中奥からの「上り荷」の経路は、成羽川の上流の小谷をめざすルートであることを新見莊三職注進状の分析により推定した。

割符のしくみの研究は、史料の多い新見莊での考察に基づき、ほかの海運の発達した中間地域の莊園を検討の対象とすることで進展するはずである。従来は、割符という表現はすべて「紙片の手形」であると誤解していたために、史料の意味が十分には理解できていなかった。割符には「上り荷」の意味もある。そこで、北陸などの中間地域に属する莊園からの割符による年貢京進を検討したが、大方は新見莊の割符のしくみと同様であることがわかった。

室町・戦国期莊園制を支えた割符

—新見莊や北陸など中間地域莊園の事例—

はじめに

網野善彦が一般向けの著書のなかで、中世の錢貨の流通に関わり、「錢の送進にあたって、替錢、割符を用いるようになるのも、さきにふれたように十三世紀後半以降のことだったが、十四世紀以降になれば、それはまったく日常のことになり、信用貨幣ともいふべき十貫文の額面をもつ割符、手形が、日本国の全体に自在に流通するまでになってきた」と論じた^①。割符が広汎に流通する信用貨幣の如きものであるとするのは、桜井英治の主張に影響を受けたものであろう^②。しかし、割符は近世以降の信用通貨と同様に流通性のあるものではない。桜井の主張する「割符＝高額紙幣」論を支える論拠は薄弱で、私はこれを認めることができない^③。

割符は中世社会において年貢の送進に必要な不可欠のしくみである。そして、このしくみは商人が交易圏を拡大し利益を得る手段となった。東寺文書には、備中国新見莊の年貢送進の際の「紙片の割符」の写しが六枚残っているが、それ以外に「紙片の割符」の写しは存在しない。しかし、割符が年貢送進に利用された事例が多く検出されている^④。ここでは、新見莊の割符の考察の結果をもとに、北陸から畿内に送られた割符などの事例を検討して、自説を補強したい。

一 割符の性格と替錢

新見莊での割符の初見は、「東寺百合文書」ル函二二一号・岡山県史家わけ文書』八〇号（今後、「百合」ル二二一・『岡』八〇などと略す）、建武二年（二三三）六月二十五日、新見莊地頭方預所沙弥明了注進状である。この文書や他の新見莊での割符の史料を分析・検討した結果、年貢を東寺に京進するために利用された割符の性格が明らかになった^⑤。それを列挙すると、①割符という用語には、「紙片の割符」と「上り荷」の両方の意味があった（在地の莊官や都の莊園領主にとっては「紙片の割符」、京上を請け負った問丸等にとっては購入した特産物の「上り荷」、②「紙片の割符」に流通性や貨幣的交換価値はない、③「上り荷」の存在が「紙片の割符」に価値を付与する、④「紙片の割符」は割符付・裏付を経て現錢化され年貢錢に姿を変える、⑤専ら年貢の送進の際に使用され、「上り荷」の運送賃として夫賃が商人に支払われる。

新見莊の代官・三職・百姓らの手紙には、割符と同義語として「替錢」の語が使用されることはない。応仁二年最勝光院方評定引付で「境割符替錢事」^⑥とあるのは、「割符を現錢化する」との意味で使用されている。一方で、新見莊などの年貢取入を決算した東寺の最勝光院方年貢散用状^⑦には、割符を現錢化する際に「カイ錢取（割符が現錢化されたものを運ぶ使者）」の語が多く見られるので、東寺の僧の間では「サイフ」と「カイ錢」は同義として理解されていた。ところで、新見莊以外での替錢の用例には、遠隔地間の借錢の

預状を指す場合がある。また、割符は徳政の対象にはならないが、利息付き替銭は徳政の対象となった⁽⁸⁾。従って、仮に債権的価値を付帯して流通する手形が存在するとすれば、割符ではなく替銭の方である。

二 備中国新見荘の惣請と年貢京進

新見荘では、寛正二年（一四六二）に惣請となった。請負った内容は、現米七七石・現銭一四〇貫文や大豆・夏麦・漆・紙・粟などで、一石＝一貫文とすれば、銭高では約二一七貫文以上である⁽⁹⁾。前代官の京兆家被官安富智安の代官請一五〇貫文に比べれば、相当な高額である。しかし、実際の納入額は、表1によれば一年間では最高一三〇貫文である。年貢納入額の合計七七貫五〇〇文のうち、割符で納入された額は七二七貫五〇〇文で、年貢京進の九六％が割符により納入されている。そこで、新見荘の惣請は割符の存在なしには実現できなかったと考えられる。新見荘の高瀬地区は、鉄による年貢の納入が見られるだけでなく、他の地域に比べ早くか

表1 新見荘の年貢納入額と割符納入率

年	納入額	割符分	現銭による納入額	割符納入率
寛正2	110	110		100
寛正3	102	80	2+8+12+5=22	78.4
寛正4	95	90	5	94.7
寛正5	80.5	77.5	3	96.2
寛正6	130	130		100
文正元	80	80		100
応仁元	80	80		100
応仁2	60	60		100
文明11	20	20		100

注：納入額などの単位は、貫。割符納入率は％

ら年貢の代銭納が行われている。高瀬の鉄生産は、畿内の商人を引きつけ、輸入された宋銭が在地に蓄積された。そのことから、高瀬地区の人々の主導により割符による年貢の京進がすすめられたと考えられる⁽¹⁰⁾。

念のために、年貢京進と京上夫との関係を考察しておく⁽¹¹⁾。表1では、現銭による年貢京進は六回見られるが、これらは京上夫による。寛正四年（一四六三）には、新見荘の京上夫は、年に六度徴発され、もし怠ると一度につき一貫五〇〇文納めなければならない契約となった⁽¹²⁾。京上夫の選抜方法は不明であるが、おそらく名単位に一定の順番で決定されていたと思われる。京上は一度に付き夫一人で、馬などの輸送手段は用いず、徒で赴くので、ほぼ一〇日間を要する（表2）。寛正三年（一四六二）六月二十日に新見を出立し東寺に二十九日に到着した京上夫の例を見てみよう⁽¹³⁾。

昨日^{廿九日}、新見庄人夫一人、上洛参候事、年貢銭彼は現銭拾貳貫文到来之内、貳貫文去年違割符分、四貫文去年々貢銭、六貫文当年夏麦代銭、且納之分云々、（中略）此外人賃壹貫文之由、注進之、次紙一束納之、

表2 最勝光院方評定引付に見える京上夫による現銭運送

記載日	運送額	運送期間	関係史料
寛正3年 3月 3日条	2貫文・紙2束	2月23日→ 3月 2日(10日間)	『百合』サ99・100・『岡』358・359
寛正3年 4月27日条	8貫文・紙1束	4月18日→ 4月27日(10日間)	『百合』ゆ60・『岡』1135
寛正3年 7月 1日条	12貫文・紙1束	6月20日→ 6月29日(10日間)	『百合』サ103・『岡』362
寛正3年 9月 5日条	5貫文	8月26日→ 9月 5日(10日間)	『教』1695
寛正4年閏6月1日条	5貫文	6月22日→閏6月 1日(10日間)	『百合』ツ225・『岡』138
寛正5年12月29日条	3貫文	12月19日→12月28日(10日間)	『百合』サ368・『岡』590

寛正3年引付：『百合』け13・『岡』823、寛正4年：『百合』け14・『岡』824、寛正5年：『百合』け16・『岡』825

一二貫文を京進納入したとするものの、実際に運搬したのは現錢一貫文であったと思われる⁽¹⁴⁾。一貫文が三・七五kgとすると四一・二五kgである。この重さは、京上夫の運搬としては異例であったために、「人賃壹貫文」を要求し、特例として貫別九〇文として「夫賃」九九〇文が認められた⁽¹⁵⁾。この四一・二五kgが京上夫一人が運搬できる最大量であったと考えて良い。当時は京上夫の員数が問題となるなど⁽¹⁶⁾、京上夫による現物年貢の京進が困難になるなか、割符による年貢送進が莊園制維持に不可欠となったと思われる。なお、寛正三年には四度も現錢により年貢が京進されているが、これは割符商人が新見莊に來なかつたためである⁽¹⁷⁾。他の年の場合も同様で、新見莊は年貢送進を割符のしくみに依存していた。

京上夫に「人賃」(「夫賃」)が認められたのは、前述の寛正三年の一度だけである。新見莊で一般に夫賃といえ、一般に商人が「上り荷」の割符を運ぶ運送料である。新見莊ではその夫賃は地下の負担として除分となった。地下が商人に支払い、年貢の除分として年貢算用が行われる。夫賃は一〇%から一三%であるが、農民側の損にはならない⁽¹⁸⁾。

以上のことをまとめておこう。①新見莊では惣請の契約額である現米と現錢あわせて約二一七貫文を送進することはなく、最大が寛正六年(一四六五)の一三〇貫文であるが、それはすべて割符によって京進された。②従って、惣請の実現は割符屋の存在が必要であった。中世後期において莊園制の存続を支えていたのは、商業資本(割符屋・問丸・借上)であり、加えて畿内港湾への船運ネット

ワークであった。③割符屋は、「紙片の割符」と交換された錢で購入された特産品(「上り荷」)の運送費用(夫賃)一〇〜一三%を得るだけでなく、「上り荷」を畿内で高値で売ることで利益を獲得した。割符のしくみは、在地・莊園領主・商業資本の三者それぞれを利用するものであった。

三 新見莊からの「上り荷」の運搬路

備中国新見莊の京上夫の京都までの経路はすべて陸路である。新見から南下して備中松山(高梁)へ、そして東向にして備前金川から旭川を渡り、関所のある三石を経由し播磨へ入り、山陽道を道成に京都まで進んだ。これが京上夫の携えた「紙片の割符」の道程である。一方、新見莊で年貢錢を「紙片の割符」を替えた商人が、その錢で購入した鉄などの商品(「上り荷」)を京都までどのような経路で運んだのであろうか。漠然と新見から高梁川を下る船運に依っていたと考えていたのではないだろうか。改めて、「上り荷」の運送経路を考察してみよう。

新見莊に隣接して神代郷がある。神代郷は伊勢神宮領莊園(御厨)で京都經由の人夫が伊勢に頻繁に送られていた⁽¹⁹⁾。そのため、新見莊からの京都への注進状などは、神代夫に委ねられることもたびたびあった。新見莊で年貢錢を割符にした商人が、「上り荷」を運ぶ経路を特定することは、史料上では困難であるが、以下に示す①〜③の史料を分析することで推定したい。

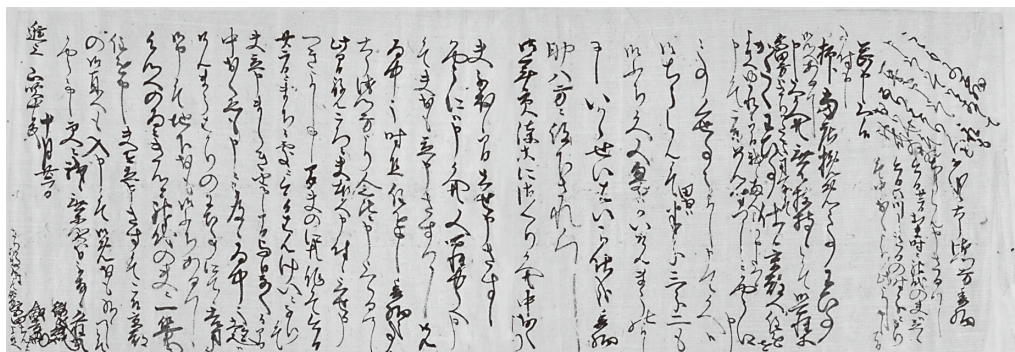


図1 「百合」ゆ68、(寛正6年)10月22日、新見荘三職注進状
(京都府立京都学・歴史館 東寺百合文書WEBより)

①(寛正六年)十月二十二日 三職注進状 「百合」ゆ六八・「岡」
一一四一(図1)⁽²⁾

なをく太郎衛門方、委細^(注進)ちうしん申さるへく候、今日^(廿二日)廿二日
むま時^(午)ニ、神代の夫ハ立候、今日ひつし^(未申)さるの時分になり候
て、中^(奥)おくより、此^(由)よし申候間、こ、もとの子細、申上候ハて
ハと、存候て、一筆申上候、これも五^(里)りはかり、人をお^(通)わせ候
て、神代の夫ニ事付申候、御心^(得)へあるへく候、宮田方ハさりか
たき用所候て、よそ^(余所)へゆかれ候間、我ら兩人より申上候、
畏申上候、

抑、当庄損免之事、わ^(能)ひ事申上候へ共、無御扶持候て、御百性
等、かたくわ^(曲)ひ事仕候、京都へ注進を申候てこそ、めんす^(免)へく
候ニ、かやうに申候事、くせ^(曲)事之よし申て候へハ、御ちうしん候
て、田おハ半分・三分二も御ふち候へ、又畠^(皆損亡)ハかいそんまうのよ
し申候、いか^(如何)、せいはい可仕哉、委細、助八方^(田舎)ニ仰下され候へく
候、御年貢漆等につくり候へ共、中^(奥)おくより、夫不出候間、上せ
申さす候、かやうにハ申候へ共、又百性中へ申候て、夫おも立申
さすへく候、先^(田舎)あの中之時宜、注進申候、委細之事ハ、太郎衛門方
より、念比^(田舎)ニ申上らるへく候、此間ねんころニ、夫本へ申付候、
上せ申へきよし申候間、夫の^(前)に共、作候て、今日廿二日^(待)ニま^(待)ち候
処に、今日^(晩景)はんけい^(二)なり候て、夫立申ましき由申候間、与日な
く候間、中^(奥)おくゑも申^(二)不及候、ゐ中之趣ハ、そんまうはかりの
わひ事にて候、吉用^(急度)ニ御申候て、地下おも御ふちあるへく候、御
心への為ニ、きつと神代の夫ニ一筆注進申候、夫を立申さす候て

こそ、京都の御耳へも入申候て、御免おも給候へく候とて、かやう^ニ申候、更々我ら無等閑於不存候、恐惶謹言、

十月廿二日

衡氏（花押）

盛吉（花押）

進上山吹中殿

宮田^{はん者}
よそへ

さりかたきひま入候て、他行候、

②（寛正六年）九月三日 中奥百姓申状「百合」え一二一・「岡」九六五²³

なをく^{（衛門）}申上候、この太郎^{（下）}ゑもん^{（扶持）}ニ御ふち候ハ、御きりか^{（切紙）}ミ御くたし候ハ、畏入候へく候、

畏入候、仍先日申上候つるむきねん^{（麦年貢）}くの事、御そん^{（損）}しまへ□□く

候、よきやうに御申候て、御ふち候ハ、ミなく^{（余人）}畏入候へく

候、もし又よしんの御代くわん^{（官）}御くたり候ハ、この分をよきや

う^{（下）}御申候て、御くたり候へく候、御心得のためニ申上候、くわ

しくハ此太郎ゑもん^{（後）}ニ御たつね候へく候、恐々謹言、

九月三日

上しの御かたへ

まいる

中奥

御百姓中より

③寛正六年最勝光院方評定引付「百合」け一八・「岡」八二六・十

一月四日条

一、新見庄損亡事、重而三職致注進、々々状二日到来、高代人夫

言付上了、

①は田畠の損亡による年貢の減免を訴える三職注進状、②は中奥百姓が代官祐成の中間太郎衛門を頼って作成した申状で、②が先行して①が作成された。そして、②は①とともに神代の夫に託され、③の記事にあるように東寺へ届けられた。

金子衡氏と福本盛吉の二人で作成した三職注進状は、神代夫が出立した十月二十二日に記された。評定引付によればその神代夫（高代人夫）は十一月二日に京着した。従って、十一日間を要したことになる。

この三職注進状には、神代夫の京都出立情報を如何にして得たかが詳しく記されている。神代夫が午時（十二時頃）に出立したことを、未申（午後三時頃）に中奥からの情報で知った。そして「五りはかり人をおわせ候て神代の夫ニ事付申候」²⁴とあるので、神代夫の経路は、正田^{（しょうでん）}の渡しを経て新見往来から金川往来を行く道筋ではない。なぜなら、もし神代夫が高梁川の渡し（正田の渡し）を利用したならば、三職たちの居所近くを通過するので、その情報は三職に届くはずである。神代夫は新見荘内を通過する西向きに進んだのではなく、南向きに進んだと考えられる。神代^{（こうしろ）}↓八鳥^{（はしり）}↓高山^{（たかやま）}の西↓西山^{（こたに）}↓小谷^{（こたに）}の船着場²⁵↓成羽川の可能性が大である（図2・a）。この八鳥から小谷の陸上ルートは8km強で成羽川までの距離が最も短い。おそらく、神代夫の最初の宿泊は、西山から小谷であろう。そして、成羽川を船で下り、落合を経て高梁川の本流にでた。この後、神代夫は再び陸路で金川往来を歩いたのか、そのまま船で瀬戸内海まで行ったのか不明であるが、多くの荷物を伴っていたならば後者

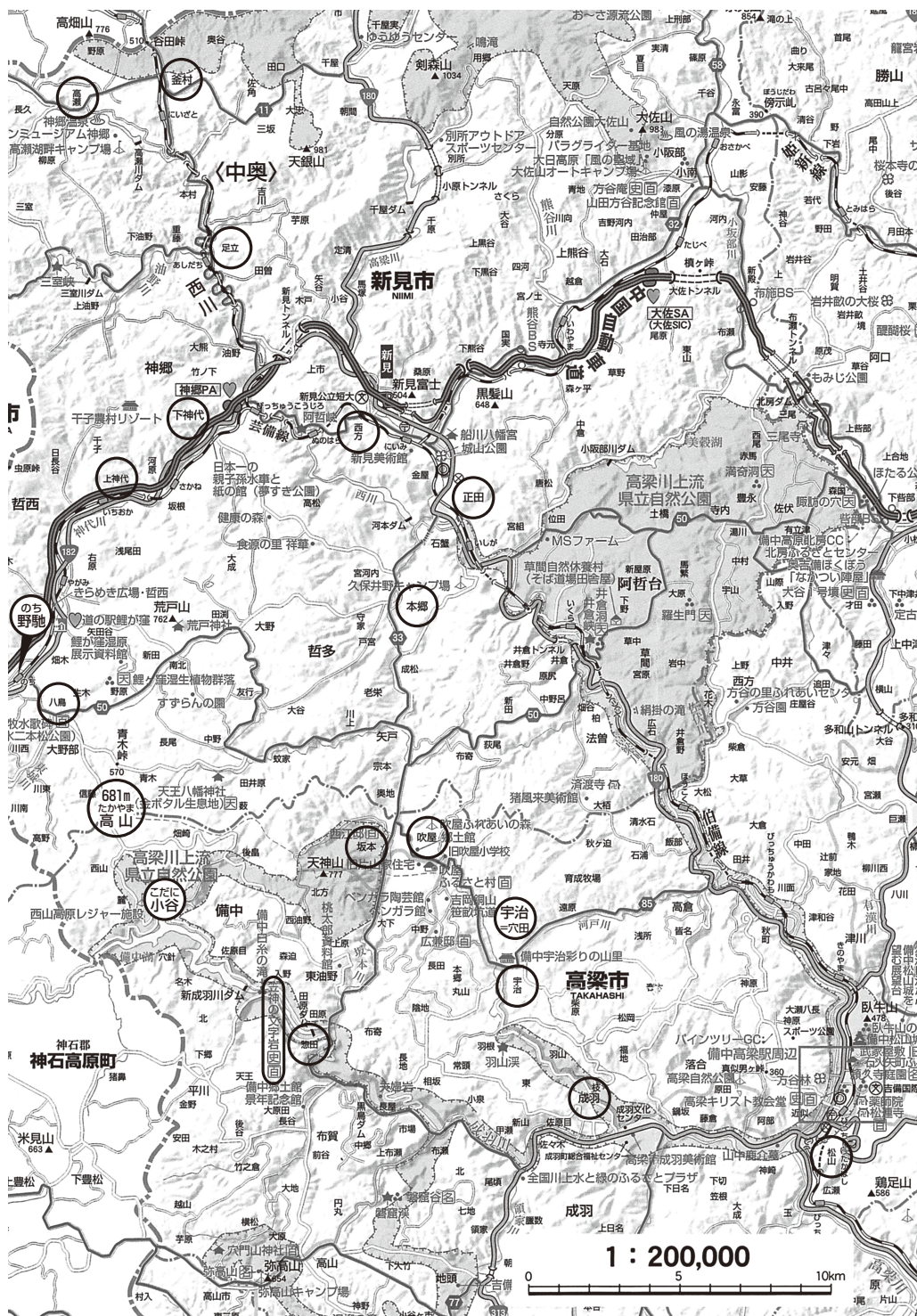


図2 a. 高瀬・足立 → 神代 → 八鳥 → 高山の西側 → 西山 → 小谷 → 成羽川 (現在の県道313号線)
 b. 西方 → 吹屋の西側 → 坂本 → 惣田 → 成羽川 (現在の県道33号線)
 c. 西方 → 吹屋 → 宇治 (=穴田) → 成羽川 晴れの国おかやま旅マップ(岡山県発行)を加工

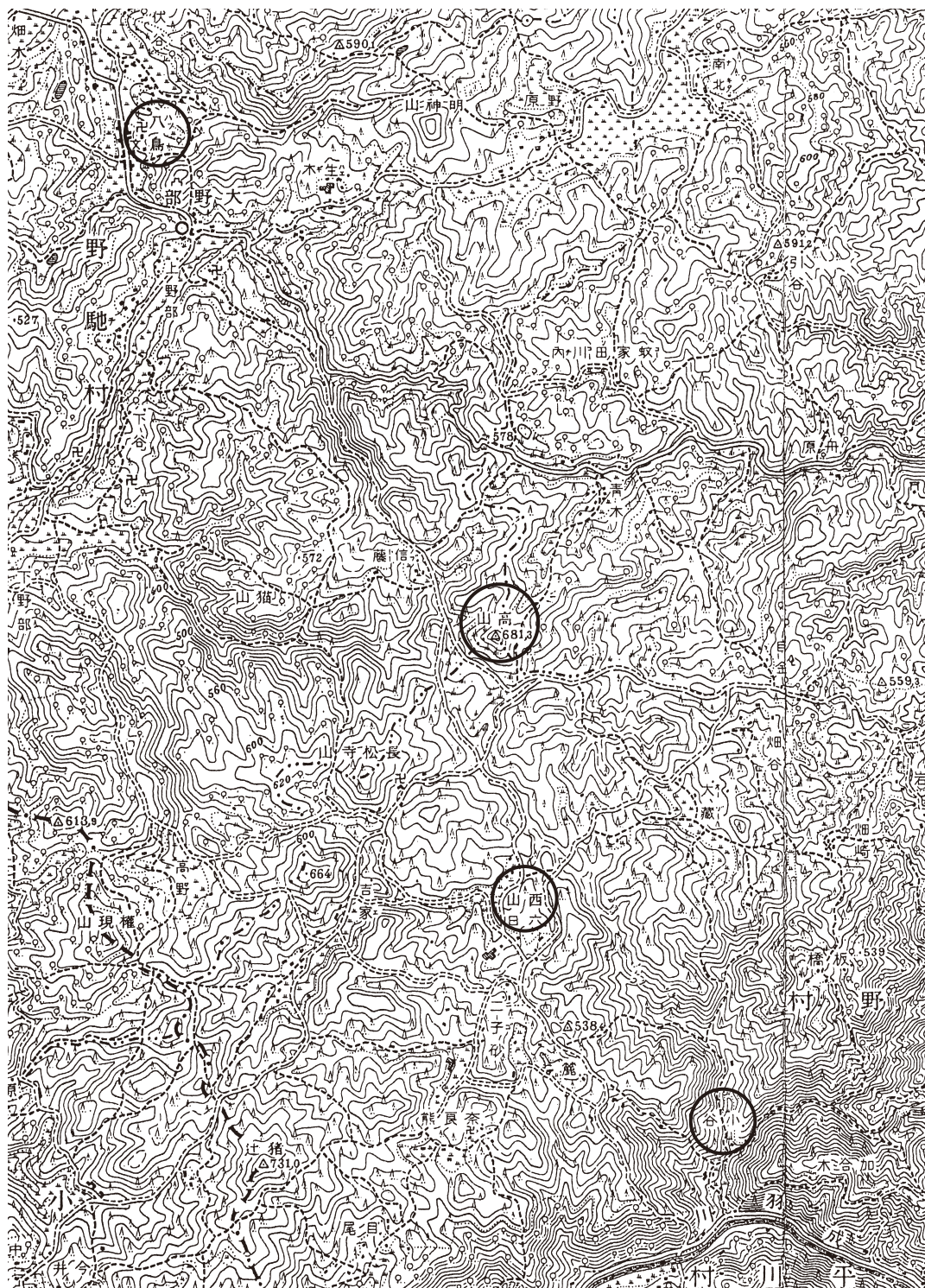


図3 明治31年測図・同34年製版 新見（部分） 大日本帝国陸地測量部

八鳥 → 高山の西側 → 西山 → 小谷 → 成羽川

であろう。とすれば、神代からの「上り荷」は勿論、新見荘の中奥・高瀬からの「上り荷」もこのルートで運送された可能性が高い(図2・図3)。(26)

成羽川は早くから物資の運搬に利用されていて、現在の広島県東条付近からの鉄などが水運によって運ばれていた。徳治二年(二三〇九)に南都西大寺の僧の協力を背景に石大工伊氏により成羽川の水路が開削され、神代↓八鳥↓西山↓小谷のルートが開発された。(27)神代郷や新見荘の物流は高梁川の西側の高原を南下して、成羽川の船着き場と思われる。特に、新見荘中瀬・高瀬からの鉄などの物流ルートは、西川↓神代川↓神代↓八鳥↓高山の西↓西山↓小谷の船着場↓成羽川↓落合↓高梁川↓西阿知↓瀬戸内が想定される。(28)

四 北陸など中間地域荘園の割符

新見荘の京上夫一人が徒で運搬できるのは、精々一貫文程度の錢束であって、それ以上の年貢錢を運搬することはなかった。新見荘では、運送業者を兼ねる割符屋商人が年貢錢を商品(「上り荷」)に替えて京進した。他の荘園の年貢送進はどうであろうか、年貢送進に利用された割符を北陸などの荘園で考察してみよう。

(1) 近衛家領越前国宇坂荘・加賀国安江保(「雑事要録」・「雑々記」越前国宇坂荘(現在の福井市美山町付近)へは、近衛家から直務定使が定期的に派遣されて、真綿と年貢錢が商人により京進された。

年貢錢の送進は割符のしくみが使われた。(30)

I 「雑事要録」一三冊・延徳二年・越前国宇坂荘

十二月廿九日 綿廿九屯百目 割符二ヶ半 二千四百疋也

此内正月十二日千疋

此内同十八日四百疋

此内同廿五日千疋

以上二千四百疋也

延徳二年(一四九〇)十二月二十九日に真綿二十九屯百目と「紙片の割符」二ヶ半(「半」は五貫文ではなく四貫文分で計二四貫文分)が京着した。そして、①「紙片の割符」は三枚で、千疋分は正月十二日、四百疋分は正月十八日、千疋分は正月二十五日と、それぞれ割符付をする日が指定されていた。あるいは、②「紙片の割符」が京着した十二月二十九日に割符屋に割符付をする、上記のそれぞれの日を裏付してくれた。①の場合は、割符付をする日に裏付がされるので、現錢化は割符付をする日以後である。②の場合は、その日に現錢化に成功した。①にせよ②にせよ、十二月二十九日に京着した「紙片の割符」はそのまま流通することではなく、正月十二日以後に現錢化された。なお、Ⅲの事例でも、「半」は五貫文ではなく、四貫文である。

Ⅱ 「雑事要録」二二冊・明応八年・越前国宇坂荘

九年分
二月九日 綿三十九屯 割符四ヶ 有未進

十五日 上京 頭中屋五百疋 残五百疋 六月廿日可上申云々

十八日^同 袋屋千疋

廿日^同 布袋屋千疋

三月卅日^{三条} 小袖屋千疋

明応九年（一五〇〇）二月九日に真綿三十九屯とともに「紙片の割符」四ヶが京着した。「有未進」の部分が重要である。「紙片の割符」四ヶは、その日のうちに四店舗の割符屋にそれぞれ割符付されたであろう。その結果、上京にある割符屋・頭中屋に割符付された一ヶのうち五百疋分は二月十五日に現銭化することを約束する裏付がなされたが、残りの五百疋分は「上り荷」の未進（未着）により六月二十日に再度割符付をすることになった。上京袋屋の「紙片の割符」一ヶは二月十八日、同じく上京の布袋屋のそれは二月二十日、三条の小袖屋のそれは三月三十日に、それぞれ現銭化する約束の裏付がなされた。そしてその後現銭化した。⁽³¹⁾ これらの割符は、けっして流通型割符とはいえない。なお、割符の助数詞はすべて「ヶ（か・荷）」である。

安江保は加賀国石川郡、現在の金沢市西北部に位置する。

Ⅲ「雑々記」「五」・明応三年と四年・加賀国安江保

四年二月廿三日 割符二ヶ半到来

三月十四日 サイフノ内四百疋到来

十五日 サイフノ内五百疋到来

廿一日 同五百疋

廿四日 同三百疋

廿六日 同二百疋

四月六日 同三百疋

八日 同二百疋

八月廿八日 百疋

九月九日 百疋

明応四年（一四九五）二月二十三日「紙片の割符」二ヶ半（二四貫文分）が到来した。「三月十四日、サイフノ内四百疋到来」は、「紙片の割符」二ヶ半の内四貫文の銭が到着したという意味であろうから、「上り荷」の到着により二四貫文が分割的に現銭化されたのであろう。同様に十五日に五百疋、二十一日に五百疋、二十四日に三百疋、二十六日に二百疋、四月六日に三百疋、八日に二百疋がそれぞれ現銭化された。例Ⅰと同様に「半」は四貫文分である。

(2) 北野社領加賀国^{とみづか}富墓莊（「北野社家引付」『加能史料 戦国Ⅳ』二〇〇四年）

北野天満宮領富墓莊は加賀国江沼郡、現在の加賀市富塚町・柴山潟西辺に位置する。

延徳四年（一四九二）五月二日条

一、柴山割符貳荷、同現物四貫文三百文到来、但割符一者坂本^ニ在之由申間、可社納由申而返之、

加賀国富墓莊の代官柴山九郎左衛門尉から「紙片の割符」二荷と現物四貫三百文が到来した。但し、「上り荷の割符」一荷は坂本にあるというので、「紙片の割符」を現銭化して社納するようにといて、使者を坂本へ返した、という意味であろう。前者の「割符

「貳荷」は「紙片の割符」であるが、「上り荷」が意識されて数詞は「荷」と表現されている。後者の「割符一」は坂本津にあるというのであるから「上り荷」を指していて、京都に到着した「紙片の割符」を坂本へ持参して「上り荷」と照合して現銭化して社納せよと命じている。一文の中に、割符が「紙片の割符」と「上り荷」との両方が登場する好例である。

延徳四年五月三十日条

一、柴山割符一千疋、已前於坂本可渡由申間、無謂由申返之處、今日当坊へ持送也、

代官柴山が割符千疋は以前に坂本で現銭化して渡すと言ったので、謂われのないことだといって返答したら、今日坂本から梅松院へ持ってきた、という意味がある。富墓荘からの割符は坂本の商人の扱いであり、「紙片の割符」が京着しても現銭化するためには坂本の割符屋に割符付をする必要があった。従って、「当坊へ持送也」は、坂本で現銭化された一〇貫文を京都の北野社松梅院が取りに行くのではなく、代官柴山が坂本から松梅院まで運んできた、という意味である。

(3) 上賀茂神社領能登国土田荘〔賀茂別雷神社文書〕『加能史料 戦国Ⅱ』二〇〇〇年)

賀茂別雷神社の荘園であった能登国土田荘の年貢収納に土倉が深く関わっていた⁽²⁾。この荘園でも年貢の京進に割符が利用されていた。土田荘は能登国羽咋郡、現在の志賀町南部に位置する。

長享二年分(一四八八) 土田荘公用銭算用状

拾貫文同廿日さいふ内、

五百四十文 同一日一社へ御樽代、此内四十文当月利八文子、

卅文 同日新左衛門方海津へ下時出立酒直、

貳百五十一文 同三日十五人御寄合夕飯不足分、

三貫貳百四十文 当月二日日供料借錢上返弁、此内貳百四十文同月利分八文子、

五百五十一文 同六日十五人御寄合夕飯新左衛門方マテ、

廿八文 同七日新左衛門方さいふ付上り行時酒直、

貳百文 同八日浄願被召時一献十五人数マテ、

四十文 同十一日豊田方使給酒直、

廿五文 同日両雜掌御出京酒直、

五十文 同日新左衛門方さいふノうら付ノ出立、

十四文 同日豊田方へ正税ノたはらノ代、

卅文 同十四日新左衛門方坂本へ下時酒直、

百七十文 同十五日大黒屋使給酒直御出方マテ、

百四十文 同十六日新左衛門方さいふ銭取上り行時朝飯、但十

五人御中ノ定、

五十代五百^{五十五}文 文明十八年小野郷司得分不足ノ入立、

三百文 同廿日新大夫茶代、同茶碗代まで、

四百文 同日職中同物書給訪分、

三百八十文 同十七日十五人御寄合御一献、

一、十月廿四日香川方へ樽参時肴代借書九百九十二文、此内百廿

文十月・十一月兩月利八文子、此内十二月二日收納時三百十七文返弁之、殘而、六百七十五文

以上、七貫七百卅七文、此外貳貫二百六十文未進、右、散用状如件、

同十二月廿日

修理亮（花押）

左京進（花押）

壱岐守（花押）

新左衛門（賀茂社務使・河口久守）は、十二月七日に割符付をし、十二月十一日に割符の裏付に成功し、十二月十六日に坂本で現錢化して京都へ運んでいる。新見莊の割符の現錢化の過程と同様である。河口久守が京都から海津に下向した理由は、「上り荷」の海津到着の確認であろう。「上り荷」は、能登から敦賀湊、敦賀からは西近江路（七里半越）を経て海津の湖岸に到り、さらに琵琶湖を運漕され坂本津で荷揚げされると思われる。

（4）東大寺領周防国衙領（東大寺文書）

周防国衙領は中世を通じて東大寺造営料所として、年貢を東大寺に上納し続けた。

周防国目代玉舜房圭範諸方渡米注文⁽³³⁾

（端裏書）

「此両通をハ披見候て、可給候也、」

湊丸^江渡米注文

（中略）

（紙継目裏花押）

豊後孫三郎割符方^江渡米注文

合 応仁三^{丑己}二月 次郎右衛門執進上之、

割符六内^{堀ヨリ三}

七十參貫文

加賃分拾二貫文、兵庫ヨリ南都マテ運賃壹貫文之由申へ、

分米百四石貳斗

拾石別七貫文宛

此内遣方

拾石

大前公文名上足子歳分内

貳拾石

亥歳周才持上奉加錢分、割符於路次失了、

然間

此米不渡、仍只今遣方^二仕候也、

拾石八斗二舛四合

富田公用之内

已上四十石八斗二舛八合渡之、

殘未進六十三石三斗七舛二合

富田公用此後も納候者、可渡之候也、

卯月五日

玉舜

油倉^江

参

この史料の解釈は難しい。本多博之は「これは、目代玉舜房圭範が豊後孫三郎と取引を持つ周防国現地の「割符方」に年貢米を納入し、そこで振り出された「割符」を「次郎右衛門」が携帯して東上、堺及び兵庫で換金したことを示すものである」と解釈した。⁽³⁴⁾

しかし、「割符方」は商人豊後孫三郎自身であろう。この文書は

豊後孫三郎へ未進分の米を渡すことを周防目代玉舜房圭範から東大寺油倉へ報告した注進状である。最初に「湊丸^江渡米注文」と題する文書があるが、湊丸も豊後と同様に商人であろう。割符屋の豊後は周防国衙領に出向き、目代玉舜から十分な米を得ないまま、堺と兵庫で現銭化できる「紙片の割符」を目代玉舜に振り出した。この時、商人豊後は別の莊園などから年貢輸送を請負い、不足を充当して「上り荷」を兵庫・堺に運漕した。目代玉舜は商人豊後に「来納」の契約をしたことになる。その結果がこの注文であり、将来、富田から納められた「公用」米が商人豊後に渡されるのである。

本多の割符の換金化の説明はその通りであろう。堺・兵庫で「紙片の割符」は「上り荷」と照合して現銭化された。周防から瀬戸内を経由する「上り荷」の夫賃が一二貫文（二〇％）でこれは堺・兵庫商人に支払われた。また、兵庫より東大寺までの運賃が一貫文で、これも必要経費である。結局、現銭化された六〇貫文に一二貫文の夫賃と一貫文の運賃が経費として加えられ、在地の周防国衙領は七三貫文を東大寺に納めたことになる。なお、兵庫から奈良までは、おそらく大和川の水運などを利用して六〇貫文（二二五kg）を運送したのであろう。ここでも割符は高額紙幣として流通することはない。港町に店を構える割符屋商人は夫賃などの大きな利益を得ていた。

この割符を取立為替（逆為替）とする見解があるが、夫賃や運賃の説明ができないので誤っている。³⁵「兵庫ヨリ三」などの解釈を「兵庫より周防国衙領へ三」と考えているが誤りであろう。この

「ヨリ」は、同じ史料内に「兵庫ヨリ南都マテ運賃」とあるだけでなく、他の史料にも「堺并に尼崎ヨリ分也」・「堺ヨリ替ノ駄賃十貫文^三二百文引之商人方³⁶」とあるので、割符を現銭化をする港の割符屋から奈良まで運ばれるという意味上での「ヨリ」である。

（5）三条西家領越後青亭座（『実隆公記』）

文明十六年（一四八四）十二月二十九日条

自天王寺割符三到来、且所祝着也、此内一相違事在之、計会明春早々可申下之分也、

この「割符」は、無論、天王寺から京都に割符付あるいは裏付のため持ち込まれたものではない。本所・三条西家が割符付あるいは裏付のために使いを天王寺に派遣し、割符を持参した使者がその首尾を報告したことを実隆は記している。なぜなら、「此内一相違」とは、違割符を意味するからである。割符三のうち、二は裏付に成功して現銭化が約束されたが、残りの一は違割符となったので、実隆は来年正月早々に現銭化の実現のために善処を命じた。割符が流通しているのなら、こうした状況は起こらないであろう。なお、この史料により、越後青亭座の年貢が割符で本所に送られたことがわかるだけでなく、越後（柏崎津や直江津）からの「上り荷」の到着地が淀川を下った天王寺浜であったことがわかる。³⁷

（6）東寺領遠江国原田莊・東大寺領遠江国蒲御厨（『東寺百合文書』・「東大寺文書」『静岡県史』資料編六・中世二）

東国における中間地域の最東部に位置する遠江国の割符の事例を検討しよう。⁽³⁸⁾ 東寺領原田荘は遠江国佐野郡、現在の掛川市西部に位置する。また、東大寺領蒲御厨は遠江国長上郡、現在の浜松市東部に位置する。

東寺領遠江国原田荘代官鈴藏常喜が、守護方の支配伸張のために、納入すべき年貢が減じたことを訴えて、以下のように東寺に述べている(図4)。⁽³⁹⁾

彼此都合五貫百廿七文御年貢之内減し入候間、十四貫文八百七十文にて候を、百廿七文をハ入立候て、十五貫文替進大事候、国方の三貫文の請取副進之候、いまた地下未進四貫ハかり候へとも、あまり月迫⁽⁴⁰⁾なり候あひた、そのふんをハさいふをおきのりにて進て候、御請取をやかて下給候□、目出度畏入存候、

一四貫八七〇文に一二七文を加えて一五貫文(省陌法)としていたので、「紙片の割符」が組まれて「替進」いる。そして、「紙片の割符」に対応する「さいふ」が沖乗の船により送られている。この「さいふ」は「上り荷」である。沖乗は地乗に対応することばで、商人が「上り荷」を船に積載し、一気に紀伊半島を南下して紀伊水道をめざしている。⁽⁴⁰⁾

東大寺油倉下部の弥太郎は、遠江国蒲御厨から年貢が送進できないことを訴えて、東大寺油倉に以下のように述べている。⁽⁴¹⁾

抑就国之念劇候て、更々御領之無納所候之間、かたく催促申候、仍納所被申候へ共、海道ふさかり候て、商人罷不上候間、不及了簡候、次われらも罷上候はん心中にて候へ共、自地下申留られ候

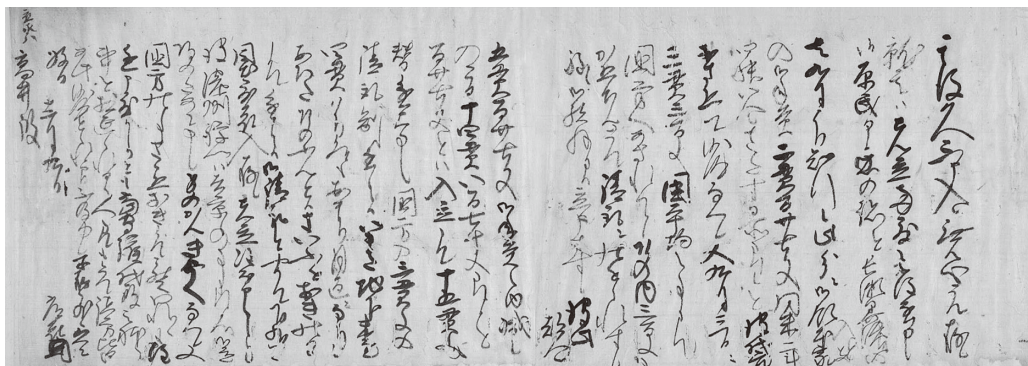


図4 「百合」え12、応永8年(1401)12月9日、原田荘代官鈴藏常喜書状
(京都府立京都学・歴史館 東寺百合文書WEBより)

て、如此地下より注進被申候、

東寺領原田荘と同様に、通常であれば年貢は海運を利用する商人が東大寺に送っていることがわかる。仮に「紙片の割符」に対応する「上り荷」の運漕であれば、(4)の周防国衛領と同様に堺で現銭化され、馬などを利用して奈良まで運ばれたと思われる。なお、遠江国蒲御厨は室町期には守護斯波氏の守護請となるが、その際に在京する守護に京進された年貢銭の算用状が残っている⁽⁴⁾。代官石田義賢が作成したこの算用状を見ると、京着した年貢額が三〇貫文など丸まった額であることや、それに一五%の夫賃が付加されていることから、割符のしくみが利用された可能性がある。

おわりに

割符のしくみが室町・戦国期荘園制を支えていたとする視点から、新見荘など中間地域を対象に論考した。以下に本論のまとめをおく。

①新見荘の年貢京進は京上夫により担われていたのではなく、割符のしくみによって実現していた。商業資本である割符屋が「上り荷」を畿内の港湾に運漕することで、室町・戦国期荘園制は成り立っていた。

②新見荘の高瀬・中奥からの「上り荷」の経路は、成羽川の上流の小谷をめざすのルートであることを新見荘三職注進状の分析により推定した。

③北陸など中間地域荘園からの割符を具体的な史料により検討したところ、地方から畿内に送られた「紙片の割符」は、港湾に店舗を構える割符屋で割符付・裏付を経たのちに現銭化されることがわかった。また、割符の語に「上り荷」を示す事例も採集することができた。これらの荘園の割符京進は、新見荘の割符のしくみとほぼ同様であった。

新見荘の在地では専ら「割符」の語が使用され、「替銭」は使用されないが、東寺では両方は同義とされていた。新見荘以外の中間地域荘園の史料では両方の事例が多く検出されるが、本論ではまったく検討・考察することができなかった。今後の課題としたい。

(1) 網野善彦『日本社会の歴史(下)』三五頁、岩波新書、一九九七年。

(2) 桜井英治「割符に関する考察」(『日本中世の経済構造』岩波書店、一九九六年所収、一九九五年初出)。桜井の流通型割符が存在する根拠は、以下の六点である。①割符の定額性。②益齋書状(「上杉家文書」)「彼年貢未進内六拾貫文、加夫賃かわし申候内貳拾貫文者、さいふニケ請取申候、此使者ニ可渡給候、泉州堺さいふニて候、ちかいたる儀候者、則以松井正才可致返弁候」。「かわし」と「さいふ」を区別し一回性送金目的の替銭に対して流通型割符が存在する。③新見荘では割符の京進を「上す」「進らす」等といい、「かわす」「かわし」とは言わないので、割符と替銭は異なる存在で、割符は流通する。④割符案に登場する「ゆハとの」「百合」サ(一七三―一七三)と「平田九郎さ衛門」(『教』一七九〇)の兩人は新見

- 莊とは無縁の人物で、別の土地で振り出された割符が新見に流入している。⑤最勝光院方評定引付応仁二年正月条の「淀ノ者ニカワシ」「境ヨリ京都マテノ割符賃四百文」が流通型割符の実例である。⑥「さいふもうつ、の用候」(「百合」え四六・「岡」九一六、応仁元年十二月十八日、三職注進状)は割符の紙幣的表現である。
- (3) 高木久史「日本中世の手形類の技術的到達点」(『社会経済史学』八一四、二〇一六年)。高木は、割符の流通性について、実態上は制約があるが、形式上(理論的には)排除できないとして、桜井が主張している割符の流通の可能性を評価している。
- (4) 豊田武「為替取引の発生」(『増訂中世日本商業史の研究』岩波書店、一九五二年)。澁谷一成「一五・一六世紀の北陸における手形類の動向と機能」(『洛北史学』五、二〇〇三年)。
- (5) 拙稿「新見荘の割符」(『日本歴史』八三四、二〇一七年)、拙著『室町・戦国期備中国新見荘の研究』日本史料研究会、二〇一二年など。
- (6) 「百合」け二一・「岡」八二九、応仁二年最勝光院方評定引付、七月八日条。
- (7) 「百合」る六四・「岡」七三一、寛正六年十二月日。
- (8) 百瀬今朝雄「利息附替銭に関する一考察」(『歴史学研究』二二一、一九五七年)、『国史大辞典』の「割符」。
- (9) 「百合」サ八九・「岡」三四九、寛正二年十一月十五日、新見荘領家方年貢等注文。「百合」ク四〇・「岡」二二一、寛正二年十月日、新見荘領家方年貢公事物等注文案。『教王護国寺文書』(以下「教」と略す)一六八〇・「岡山県史編年史料」(以下「編」と略す)一六八〇、寛正二年十二月二十一日、新見荘領家方年貢算用状。

- (10) 百姓が割符を調達した事例が二例知られている。「百合」ゆ三三・「岡」一一一〇、寛正四年三月二日、金子衡氏書状。サ三二五・「岡」五五四、文明三年八月十八日、高瀬・中奥御百姓等申状。後者は、東寺の直務支配の継続を求めて高瀬・中奥の百姓が割符を京進したことがわかる。
- (11) 徳永裕之「中世後期の京上夫の活動」(『遠藤ゆり子など編』再考中世荘園制 岩田書店、二〇〇七年)。
- (12) 「百合」オ一七一・「岡」一九〇、寛正四年十一月十日、年預堯忠新見荘人夫役支配法式置文。京上夫は毎年二人であるが、六か月分は現夫で、残りの六か月は夫銭二貫文宛とし、現夫が出せないときは一貫五〇〇文を納める定めである。
- (13) 「百合」け一三・「岡」八二三、寛正三年最勝光院方評定引付、七月一日条。
- (14) ①「百合」さ二四・「岡」一〇三九、寛正三年七月六日、新見荘年貢代銭支配状案では、「四百五十文夫賃^{六貫文}」とある。②「百合」さ一一四・「岡」一〇四〇、寛正三年七月六日、新見荘年貢代銭支配状案では、「合六貫文内 夏麦代 除 五百四十文夫賃^{六貫文}」とある。①は年貢五貫文と去年違割符分二貫文との合計七貫文の支配状であるが、これは計算上の記載であり、実際に運搬されたのは夫賃にあるように五貫文であろう。これと②の六貫文との合計である一一貫文が実際に運搬された現銭量であると考えられる。「百合」サ一〇三・「岡」三六二、寛正三年六月二十日、三職注進状でも「五貫文ハ未進分にて候、六貫文ハ当年麦年貢之代にて候」とあり、合計一一貫文である。
- (15) 前注①と②。「百合」さ一一四の年貢代銭支配状は一三通で構成さ

れているが、この他の記載には「夫賃」の計上は見られない。

- (16) 「百合」サ一〇二・「岡」三六一、寛正三年五月十八日、田所金子衛氏書状では、京上夫を「四季八人」とするように要求している。

「百合」ゆ七〇・「岡」一一四三、寛正三年十一月一日、代官祐清注進状では、祐清は「京上夫事、十二人分を堅申付」けている。

- (17) 「見代にて八貫文進上申候、此内貳貫文者、ちかいさいふの分にて候、さらにく、ゐ中二御さいふなく候て、如此候」(「百合」ゆ六〇・「岡」一一三五、寛正三年四月十八日、了蔵書状)。

- (18) 「当国一宮社務職相ろんより候て、あき人なんと、たやすからす候間、今割符おも取進上申さす候」(「百合」サ一四六・「岡」四〇〇、寛正五年九月二十一日、上使本位田家盛注進状)。同様な文言が、「百合」サ一四八・「岡」四〇二、寛正五年九月二十一日、三職注進状にもある。

- (19) 「教」一六八四・「編」一八五一、寛正三年正月十日、新見莊年貢錢算用状。

- (20) 新見莊の「紙片の割符」「上り荷」の両方とも関錢の賦課は確認できない。兵庫・堺・山崎などから陸路で京都まで運ばれる替えられた錢についても同様である。但し、寛正六年六月十二日の「カイ錢取」に「ヒロ瀬下向関舟チン以下兩人」として一三〇文支給しているので、関の存在は確認できる(「百合」る六四・「岡」七三一、寛正六年十二月日、最勝光院方年貢散用状)。なお、矢野莊では永和二年(一三七六)に海路の五カ所の関で関賃(二〇貫文の四%、八〇〇文)が徴収されている(「百合」ラ函九、永和二年学業評定方引付、十一月三日条)。

- (21) 大澤泉「備中国国衙領の支配構造と新見莊」(海老澤衷・高橋敏子

編『中世莊園の環境・構造と地域社会―備中国新見莊をひらく』勉成出版、二〇一四年)。

- (22) この文書は年欠であるが、代官祐成の中間助八と太郎衛門の動向により年号が確定する。助八は、寛正六年七月二十五日以後下向、同年十月十六日京上・十月二十五日京着している、この時には上洛している(「委細、助八方_二仰下され候へく候」に対応している)。太郎衛門は、この文書ではこの注進状とともに京上する予定であったことがわかるが、実際は神代夫と同道せず、一カ月後に上洛したようだ。それは、『教』一七九四、(寛正六年)十一月二十二日、新見莊公事物等送進状に三職とともに太郎衛門尉の署判があることからわかる。寛正六年最勝光院方評定引付十二月四日条によれば二日に京着したと考えられる。従って、太郎衛門は寛正六年十一月二十二日京上、十二月二日京着であろう。なお、最勝光院方評定引付同日条によれば、(寛正六年)十一月二十二日の年貢送進状とともに送られた半損を願う三職注進状があったはずである。

- (23) 中奥百姓が祐成中間太郎衛門上洛に合わせて麦年貢の損免を訴えたもので、中奥百姓から神代夫に託された可能性が高い。

- (24) 一里_二約四kmとすると、神代から小谷は地図上ではほぼ五里_二二〇kmである。祐清殺害事件の際の三職注進状に「我らか在所より一里計候所の御宮にておつけ打申候」(「百合」サ一〇・「岡」三六七、寛正四年八月二十七日)とある。「我らか在所」は西方で、祐清が殺害された御宮(国主神社)は上市である。西方と上市は四km弱であるから、一里_二約四kmと見なしてよい。

- (25) 現在の県道三一三号線に相当する。なお、新成羽ダムの建設により、小谷の船着き場跡は現在湖中にある。また、高山と小谷は

『教』二七七・一・『編』二二一四、永禄九年九月二十一日、新見荘使入足日記に「人夫 高山より舟付迄」と記されている「高山」と「舟付」に相当する。かつての自説を改める。

- (26) 新見荘西方からの成羽川への陸路は、西方↓坂本(吹屋の西)↓惣田↓成羽川(現在の県道三三号線)が考えられる(図2・b)。或いは、西方↓本郷↓成松↓吹屋↓宇治(穴田)↓成羽↓成羽川(図2・c)である。このルートの例として寛正二年分年貢銭算用状(『教』一六八四・『編』一八五一)の「二百文 割符料足フキヤ越時、馬チン」がある。

- (27) 新成羽ダム建設により水没した笠神文字岩の成羽川水路開鑿願文は以下の通りである(『編』一二二三、翻刻は後注の藤沢晋)。

笠神船路通事

徳治二年^丁七月廿日始之、八月一日平之畢、其時□□、右、笠神竜頭上下瀬十余ヶ所者、為日本無双難所之間、薩埵慈悲大士□懷不可不奉、不可不□、依之、相勸諸方、十余ヶ月、平之功已畢、

大勸進沙弥尊海

当国成羽善養寺

奉行□沙門実専

南都西大寺実□

根本発起四郎兵衛

石切大工伊 行経

午□藤原

- (28) 藤沢晋「十四世紀の成羽川水運開発記念碑「笠神文字岩」について——神代野御厨等生産の鉄の流通に関連して——」(『岡山大学教育学部研究集録』一八、一九六四年)。藤沢晋「成羽川の船路開発と鉄の流通をめぐって」(『高梁川』一八、一九六五年)。藤沢晋「中世後期新見庄における船給廃止と京進年貢銭納化」(『岡山大学教育学部

研究集録』二三、一九六七年)。

- (29) 備中松山から新見までの高梁川の水運は江戸初期に開発されたが、部分的には新見から高瀬舟により僅かな輸送があった(新城常三『中世水運史の研究』塙書房、一九九四年)。

- (30) 湯浅敏治「戦国期公家社会の諸様相」(和泉書院、一九九二年)。

- (31) 澁谷一成「一五・一六世紀の北陸における手形類の動向と機能」(『洛北史学』五、二〇〇三年)。

- (32) 須磨千穎「土倉による荘園年貢収納の請負について——賀茂別雷神社の所領能登国土田庄の年貢収納に関する土倉野洲井の活動——」(『荘園の在地構造と経営』吉川弘文館、二〇〇五年、初出一九七一年)。

- (33) 『東大寺文書』六四三(一一五一—一五)。

- (34) 本多博之「中世後期東大寺の周防国衙領支配の展開」(『日本史研究』二九六、一九八七年)。

- (35) 品治重治「替銭と割符」(『法学会雑誌』四六一、二〇〇五年)。
品治は以下に示す周防国衙金子算用状(『東大寺文書(未成巻文書)』一一二四—七三六—二)も取立為替であるとしている。

文正二年^丁正月十一日

正 六〇貫文 割符内 (此外十貫別二貫文ツ、賃分可渡由商人方へ契約也、豊後与三郎替 使二郎衛門 是ハ此方ヨリ堺ニテ借替也、国衙へ此旨申下問、追而国より可有答也、)

此内遣方

〇廿貫文 当所へ納、

廿貫文 方丈御得分、

拾貫文 坊主得分、

拾貫文 大行事、

已上六十貫文、遣方訖、此内貫別廿文宛雜用引之、

品治は「年貢が送られる以前に東大寺が豊後与三郎から前借してこれを決済するための取立為替が周防国衛へ送られて支払われる予定（可有答）であることを示している」とする。しかし、「此内遣方」として割符六〇貫文分の内容が示され、すでに「遣方」が完了している（文正元年十一月二十八日の同様な算用状では目代からの送付がある）。「国衛へ此旨申下間、追而国より可有答也」の意味は、年貢を取り寄せようとしているのではなく、商人・豊後与三郎へ支払うべき「十貫別二貫文」の夫賃二貫文を要請しているのである。

この文書で特に注目するべき点は、「此外」として割符の額以外に一〇貫文別に二貫文を夫賃として商人に支払うように契約していることと、堺から奈良までの「駄賃」が一〇貫文につき二〇〇文かかり商人の収入となることである。つまり、周防国衛領から堺の海運では二〇%、堺から奈良東大寺の陸運では二%の夫賃率で、夫賃が商人の利益になっている。

以上のようにこの文書が理解できるとすると、「是ハ此方ヨリ堺ニテ借替也」は、「この六〇貫文は奈良東大寺より（使者二郎衛門を割符取のために堺に派遣して）堺で割符の現錢化をした」と解釈できる。二郎衛門は東寺公人の門指道忠と同様に割符取であろう。「借る」も「替ふ」も割符が作成される時に使用される場合が多い用語であるが、この場合割符として「借りた」ものをもとの現錢に「替える」という意味で使用されたと思われる。なお、以前の拙論では「借る」を現代の用語の意味と同様に考えていたが、「借る」或いは「借用す」の意味に「割符を割符屋から手に入れる」という意味もあると考えるようになった。また、「替ふ」の本来の意味

は、「あるものを別のものにかえる」であるから、現錢を「紙片の割符」にかえる時にも、「紙片の割符」を現錢にかえる時にも使用される。

- (36) 「東大寺文書（未成卷文書）」一—二四—七三六—一、周防国衛金子算用状（東大史料編纂所影写本）。

- (37) 小野晃嗣「三条西家と越後青亭座の活動」（『日本商業史の研究』法政大学出版、一九八九年、初出一九三三年）。竹田和夫「中世後期越後青亭座についての再検討—本座・新座関係及び商人衆を中心に—」（『新潟史学』一八、一九八五年）。

- (38) 湯浅治久「室町期駿河・遠江の政治的位置と莊園制—都鄙交渉史の視点から—」（阿部猛編『中世政治史の研究』日本史料研究会、二〇一〇年）。

- (39) 「百合」、え二一・『静岡県史料編六・中世二』一三〇三、応永八年十二月九日、鈴藏常喜書状。

- (40) 村井章介「東寺領遠江国原田・村櫛両庄の代官請負について」（『静岡県史料研究』七、一九九一年）。但し、村井は「さいふ」を「紙片の割符」と理解している。村井はこの他に、「来納之割符」や現錢化日限指定の割符も紹介している。遠江国原田・村櫛両庄は、備中国新見荘と同様に最勝光院の莊園であるから、割符のしくみも新見荘の場合と同様であったと考えられる。

- (41) 「東大寺文書（未成卷文書）」一—二四—五六九・『静岡県史料編六・中世二』二二四五、（康正二年カ）五月八日、弥太郎書状。

- (42) 「筒井寛聖氏所藏東大寺文書」・『静岡県史料編六・中世二』二二四〇、康正二年正月、遠江国蒲御厨京上年貢錢算用状。

(付記1) 京都府立京都学・歴史館の東寺百合文書WEB、東京大学史料編纂所のデータベースを活用した。

(付記2) 陽明文庫「雑事要録」・「雑々記」は、東京大学史料編纂所図書室・京都府立京都学・歴史館の京都学デジタル資料閲覧コーナーで閲覧した。

(付記3) この内容は、二〇一七年九月二日に機関誌会館（京都市上京区）で行われた日本史研究会二〇一七年九月例会で口頭報告した「中間地域荘園の惣村の特徴―主に新見荘の「惣請」と年貢送進―」と、二〇一七年十二月九日に京都府立京都学・歴史館で行われた第IV期第一回東寺文書研究会で口頭報告した「室町・戦国期荘園制を支えた割符―新見荘や北陸など中間地域荘園の事例―」を土台に成稿した。当日、多くの方から貴重なご意見を頂戴しましたので、可能な限り紙面に反映させました。記して御礼申し上げます。

編集後記

『岡山朝日研究紀要』は来年度第四十号を上梓することになる。第二十四号から第三十八号まで編集を担当された辰田芳雄先生（日本史）が、これまでの研究紀要の歩みを本年度の校誌『烏城』（第一七七号）に「『岡山朝日研究紀要』第四十号上梓に向けて」としてまとめられた。

またその中でも触れられているように、昨年末から後神泉先生（日本史）の努力で岡山県立岡山朝日高等学校ホームページ（岡山朝日高校Web）上で『岡山朝日研究紀要』の創刊号から最新号までPDFで閲覧できるようになった。

関係の先生方のご尽力に感謝申し上げます。

岡山朝日研究紀要 第39号

The Asahi Bulletin 39,2018

平成30年(2018年)3月30日発行

編集者 図書課 出版・広報係
発行者 岡山県立岡山朝日高等学校
校長 田中 広 矛
〒703-8278 岡山市中区古京町2-2-21
電話 086-272-1271

印刷者 株式会社 印刷工房フジワラ
岡山市北区丸の内2-11-18